

第1章 本庄市の概要

1 自然的・地理的環境

1-1 位置

本市は埼玉県の北西に位置し、面積は89.69km²、人口は約7万8千人です。東は深谷市・美里町、西は上里町・神川町、南は長瀨町・皆野町、北は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接しています〔図1-1〕。

東京からは80km圏内で、JR高崎線、八高線、上越・北陸新幹線、関越自動車道本庄児玉インターチェンジや国道17号・254号・462号などの主要道が縦横に走り、東京と上信越・北陸方面を結ぶ交通の要衝となっています。平成16（2004）年3月の上越新幹線本庄早稲田駅の開業に伴い、本市と東京駅は約50分で結ばれています。



図1-1 本庄市の位置

1-2 気候

本市は、夏に雨量が多く冬に少ない東日本型気候で、自然災害が少なく水と緑豊かな自然環境に恵まれた地域です。

熊谷地方気象台の観測データ（直近20年）によると、年間平均気温は15.7℃で〔表1-1〕、夏季の平均最高気温は、8月におよそ38℃まで上がります。一方、冬季の平均最低気温は1月におよそ-4℃を記録するなど、年間を通して気温較差の大きい地域です〔表1-2・図1-2〕。年間平均積算降水量は105.6mmで、9月（月間平均積算降水量191.9mm）に降水量が最大となります〔表1-3・図1-3〕。

市域の北部には田畑が広がっており、風をさえぎる物がないため、秋冬には西風が強く吹きます。また、南部の山地によって、夏には湿度が高くなります。冬の強風は空っ風と呼ばれ、土埃を巻き起こすことが気候的特徴として知られています。そのため、この地方の民家は周囲を屋敷林（桧ぐね）で囲むことで強風・土埃を防いでいます。

表 1-1 年間平均気温（単位：℃）と年間平均積算降水量（単位：mm）

年	平均気温	平均積算降水量
平成 15 年 (2003)	14.9	102.5
平成 16 年 (2004)	16.1	109.7
平成 17 年 (2005)	15.0	99.2
平成 18 年 (2006)	15.3	119.9
平成 19 年 (2007)	15.8	89.0
平成 20 年 (2008)	15.4	116.0
平成 21 年 (2009)	15.5	92.6
平成 22 年 (2010)	15.8	108.9
平成 23 年 (2011)	15.4	110.4
平成 24 年 (2012)	15.1	89.9
平成 25 年 (2013)	15.6	104.3
平成 26 年 (2014)	15.3	115.6
平成 27 年 (2015)	16.0	111.3
平成 28 年 (2016)	15.9	108.4
平成 29 年 (2017)	15.4	109.0
平成 30 年 (2018)	16.4	88.0
令和元年 (2019)	16.1	121.7
令和 2 年 (2020)	16.2	113.7
令和 3 年 (2021)	16.0	98.1
令和 4 年 (2022)	16.0	104.3
20 年間の平均	15.7	105.6

【出典／気象庁（観測地点：熊谷）】

月	平均気温	平均最高気温	平均最低気温
1月	4.3	15.9	-4.3
2月	5.3	19.2	-3.5
3月	9.0	22.7	-1.0
4月	13.9	27.8	2.8
5月	19.2	31.8	8.9
6月	22.7	33.8	14.1
7月	26.1	36.8	18.9
8月	27.5	37.7	19.8
9月	23.6	34.4	14.6
10月	17.7	29.4	8.2
11月	12.1	23.2	1.8
12月	6.6	18.2	-2.5

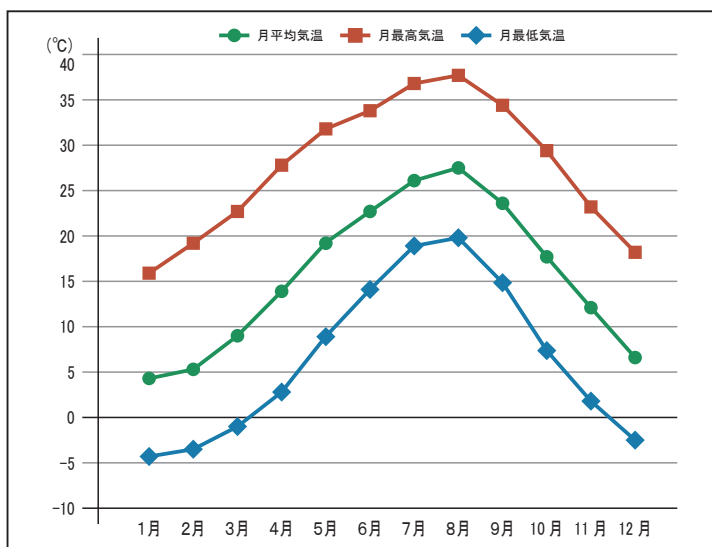


表 1-2・図 1-2 月別平均気温・平均最高気温・平均最低気温（単位：℃）

月	平均日最大降水量	平均月積算降水量
1月	19.1	30.5
2月	19.1	36.3
3月	25.5	66.0
4月	32.6	89.7
5月	41.1	108.3
6月	49.7	146.8
7月	59.2	174.4
8月	50.8	146.8
9月	57.9	191.9
10月	68.9	178.6
11月	26.7	57.9
12月	23.3	40.5

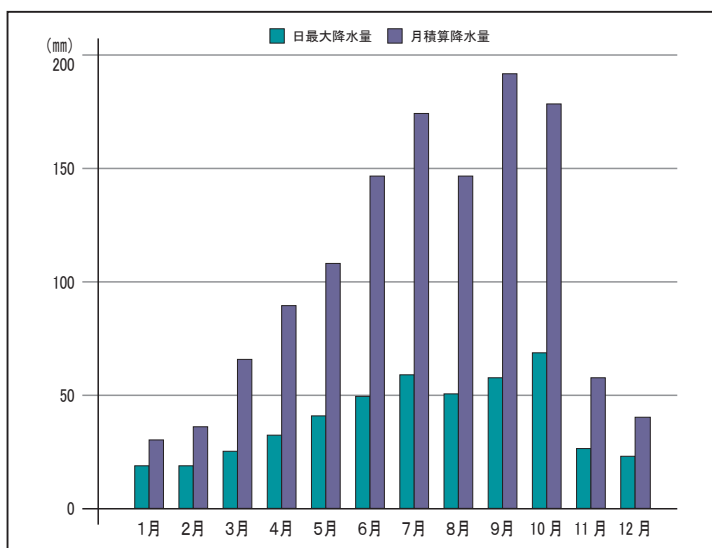


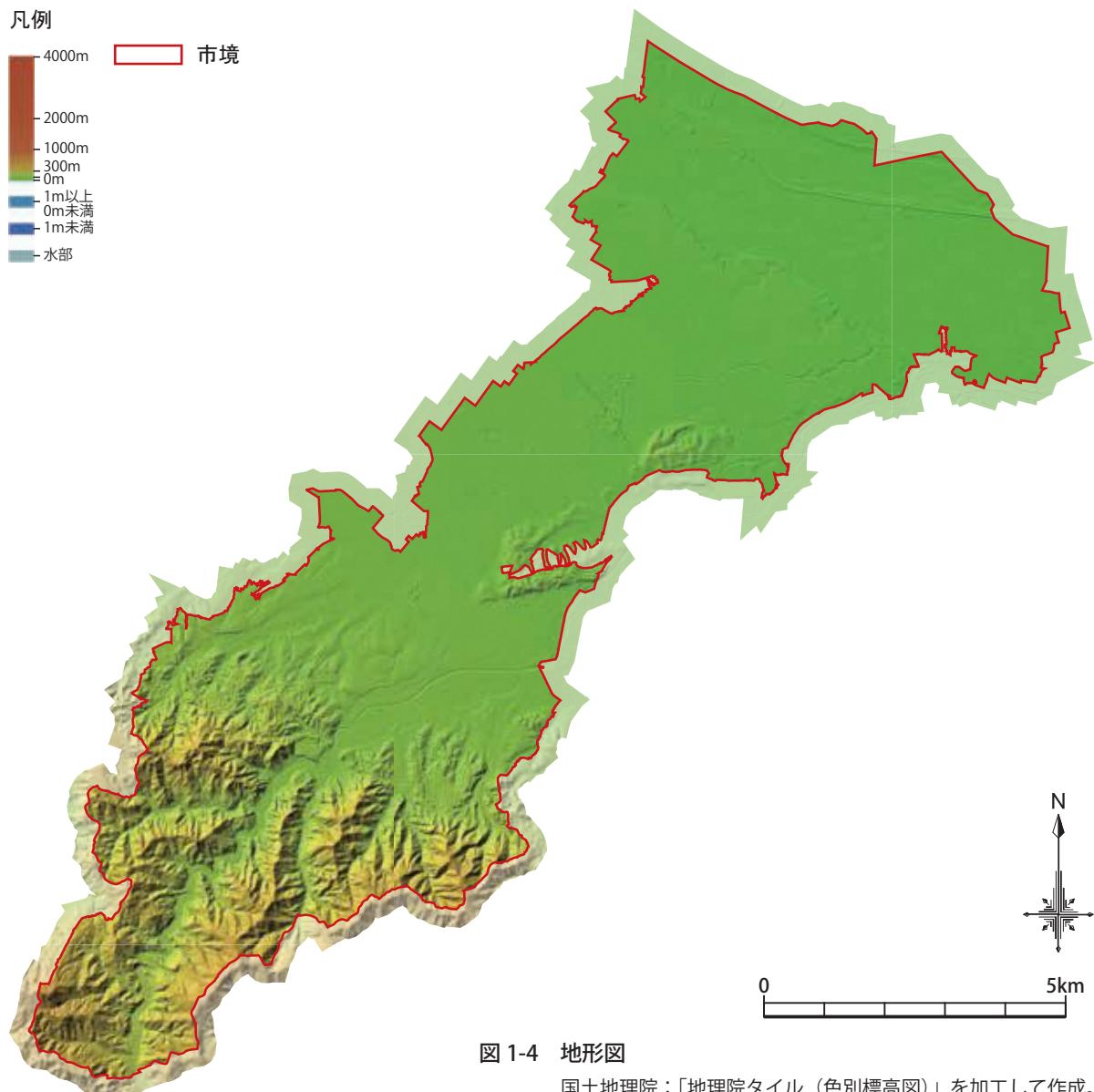
表 1-3・図 1-3 月別平均日最大降水量・平均月積算降水量（単位：mm）

【出典／気象庁（観測地点：熊谷）】 ※統計期間は平成 15（2003）～令和 4（2022）年。

1-3 地形

本市の地形は、北に利根川が流れ、北部の低地から南に向かって台地・丘陵地を経て山地へ移り変わるという特徴を有しています[図1-4]。北部から中央部の地形は、概ね平坦で安定した地盤を有しており、北部利根川沿いの低地(妻沼低地)には肥沃な沖積平野が広がります。また、低地から南にかけて台地(本庄台地)となり、丘陵地(児玉丘陵)へと連なります。長瀨町などとの境界に近い南西部は、陣見山など500m級の山々が連なる山地(上武山地)となります[図1-5]。

低地は、水田の適地であるとともに古くから洪水が多発する地域でした。一方、台地及び丘陵地は、表土が関東ローム層に厚く覆われ、降雨が地下深くに浸透するため、地下水位が深く水を利用することが困難でした。この台地と丘陵地に広がる原野は、古代から近世にかけて「武蔵野」と呼ばれていました。



1-4 地質

本市を含む高崎・深谷地域の地質は、西は神流川扇状地堆積物、東は荒川扇状地堆積物によって境され、南は三波川変成岩類、北は利根川扇状地堆積物で占められています。地形と地質との関係を見ると、山地・丘陵地、台地、低地で地質区が異なっています。山地は、古・中生界の三波川変成岩とそれを貫く蛇紋岩などからなり、丘陵地には新第三系中新統(富岡層群)が発達しています。一方で、台地には

更新統の粘土・礫層と関東ローム層が、低地には更新統の砂礫層・粘土層を不整合に被って完新統未固結堆積物がそれぞれ発達しています [図 1-5・表 1-4]。

三波川変成岩は、青みがかった岩肌に白い模様を持ち、打ち水をしたときに美しい表情を見せることから日本庭園の枯山水や侘や寂を表現する上で欠かせない庭石となっており、江戸時代には既に珍重されていたようです。また、間瀬峠付近地の結晶片岩は、片理が発達しているため剥離性があり加工も容易なので、古くから古墳の石棺や板石塔婆（板碑）・建築石材等に使われてきました。

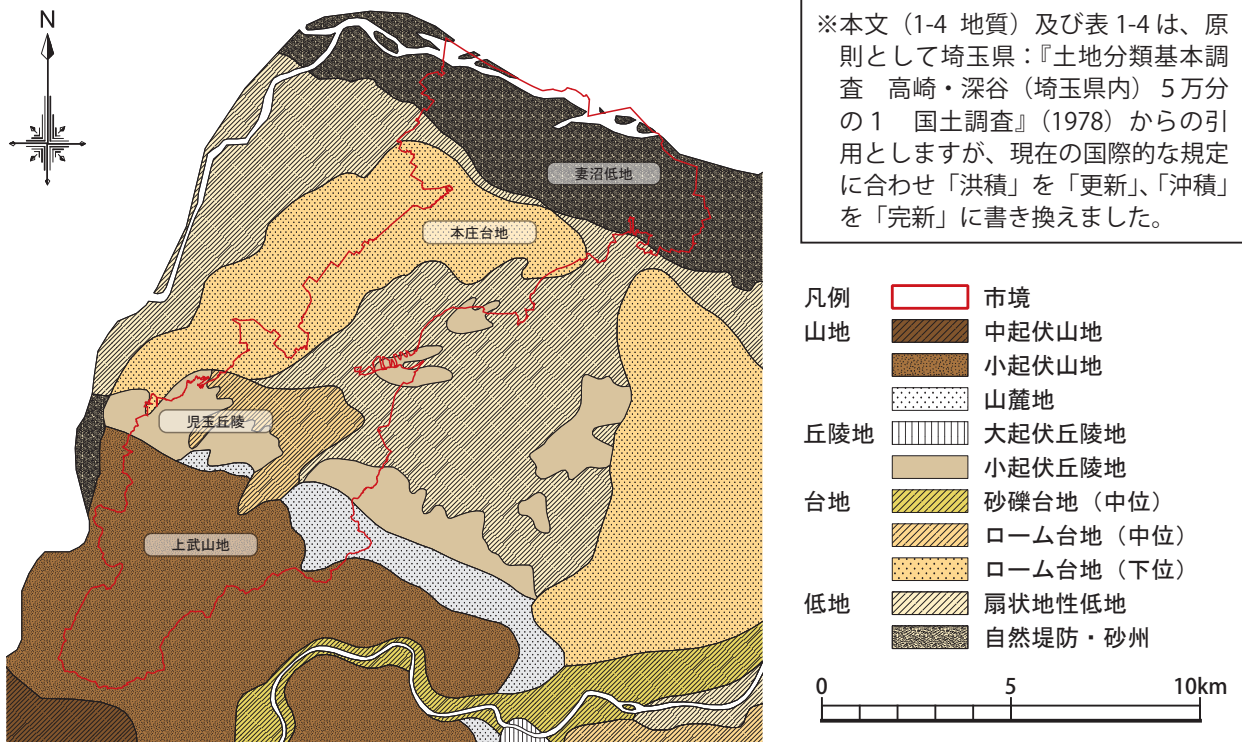


図 1-5 地形分類図

国土交通省：「国土数値情報(20万分の1土地分類基本調査データ)」を加工して作成。

表 1-4 高崎・深谷地域の地質層序

時代		地域		
		山地・丘陵地	台地	低地
新生代	第四紀			
	完新世	崖錐・麓斜面の破屑物・現河床の砂礫層	[谷地田] 泥質礫堆積物	砂泥堆積物 砂質堆積物 泥質礫堆積物
	更新世	関東ローム	関東ローム 立川ローム相当層 武蔵野ローム相当の粘土・礫層	一部埋没した関東ローム 東京層 埼玉層 古利根層
	更・鮮	[生野山・浅見山・山崎山・仙元山各残丘] 浅見山砂礫層		
第三紀	中新世	富岡層群 ・板鼻層 ・吉井層 ・庭谷層 ・原田篠層 (※) 露頭にはあらわれず	・井戸沢層(※) ・小幡層(※) ・牛伏層	
中生代		跡倉層	蛇紋岩貫入 三波川変成岩 (=長瀨系)	
古生代				

【出典/埼玉県：『土地分類基本調査 高崎・深谷(埼玉県内) 5万分の1 国土調査』(1978)】

1-5 自然環境

1) 動物・植物

過去の調査より、本市には[表 1-5]に示す動物の生息が確認されています。埼玉県が実施した調査(平成23(2011)年度)では、カワラサイコ群落、キバナノアマナ群落、クロモ群落、ミズオオバコ群落、サンショウモ群落といった希少植物が確認されました。また、動物ではチュウヒ、ハヤブサ、サシバ等の重要な種(注目種)の生息が確認されています。しかし、近年では市街地拡大や農地減少等の環境変化に伴い、これらの重要な種の生息地や個体数が減少していると考えられています。

本市には、鳥獣の保護繁殖等を目的とした区域が定められており、県指定鳥獣保護区として秋平、^{あきひら}若泉公園、^{わかいずみ}児玉白楊高等学校の3か所[図 1-6]、特定猟具使用禁止区域に大久保山、^{おおくぼやま}坂東大橋、^{ぼんどうおほし}本庄、児玉、こだまゴルフクラブの5か所が指定されています。

近年では、希少な動植物の個体数の減少をはじめとする生態系の変化が生じている中で、アライグマ等の外来動物やアレチウリ等の外来植物の増加による在来種への影響が懸念されています[表 1-6]。

表 1-5 市内で確認されている動物

区分	種類
哺乳類	モグラ、アブラコウモリ、ノウサギ、アカネズミ、タヌキ、イタチ、イノシシ、アナグマ、ハクビシン、アライグマ、ジネズミ、ヒナコウモリ、カヤネズミ、キツネ、ニホンカモシカ 等
鳥類	アオアシシギ、アオサギ、イソシギ、オナガガモ、オナガ、トビ、カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、カルガモ、コガモ、マガモ、オオタカ、ノスリ、コジュケイ、キジ、キジバト、カワセミ、アカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、エナガ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カッコウ、ハシボソガラス、チョウゲンボウ 等
爬虫類	カナヘビ、ニホントカゲ、アオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシ、マムシ 等
両生類	アマガエル、トウキョウダルマガエル、ウシガエル、ツチガエル 等
魚類	ウグイ、オイカワ、タモロコ、ニゴイ、コイ、ギンブナ、ドジョウ、メダカ、サケ、アユ、ウナギ、ナマズ、ヨシノボリ、ヒガイ、ゲンゴロウブナ、ハス 等
昆虫類	アジイトトンボ、ギンヤンマ、キンヒバリ、ヒメイトアメンボ、ムラサキシジミ、クロヒカゲ、ドウガネブイブイ、カナブン、アカハナカミキリ、コエンマムシ、ヒメマイマイカブリ、イネミズゾウムシ、コガタシマトビケラ、シロハラコカゲロウ、ユスリカ、ミズムシ 等

【出典/本庄市教育委員会:『本庄歴史伍』 他】

表 1-6 市内で確認されている外来植物

区分	種類
特定外来生物	アレチウリ、オオキンケイギク
要注意外来生物	ハリエンジュ、メマツヨイグサ、ヘラオオバコ、ブタクサ、オオブタクサ、クイモ、セイタカアワダチソウ
外来生物	オオケダテ、ゴウシュウアリタソウ、オランダガラシ、ニワウルシ、ヒルザキツキミソウ、マルバルコウ、ハルシャギク、チチコグサモドキ、セイバンモロコシ、ナガミヒナゲシ

*埼玉県における2008・2009・2010年度調査に基づき生育が確認された外来種。

【出典/埼玉県:外来植物分布図(2011)、埼玉県:侵略的外来生物県民参加モニタリング調査結果】

2) 森林

本市の森林は、令和2(2020)年度時点で市域の総面積の約3分の1にあたる2,415haを占めており、その多くが民有林です[表 1-7]。市南部には水源となる豊かな森林が育まれており、東西には県立上武自然公園に指定されている上武山地が広がるとともに、南西部には陣見山などの500m級の山々が連なります。

児玉地域では、森林組合が中心となって間伐や下刈り等の森林の維持管理や林業基盤整備を行っており、森林を資源として活用するための取組が進められています。

表 1-7 現況森林面積(単位:ha)

国有		1
民有	都道府県	7
	森林整備法人	132
	市区町村	2
私有		2,273
合計		2,415

【出典/農林水産省:

農林業センサス2020(林業編)】

3) 水系

本市には北を流れる利根川をはじめ、利根川の支流である備前渠川・元小山川・小山川・男堀川・女堀川・御陣場川、このほか多くの用水路が流れています [図 1-6]。かつては本庄地域市街地に所在する段丘崖から豊かな湧水がありましたが、市街化に伴い地表面のアスファルト等が増加したことで地下への雨水浸透が妨げられ、河川流量や湧水量は激減しました。平成 24 (2012) 年以降は、埼玉県事業による河川改修工事が元小山川において進められ、水質改善等を目的とした整備が行われました。

凡例

- 市境
- 一級河川 (指定区間)
- その他の主な河川・用水路
- 埼玉県鳥獣保護区
- 県立上武自然公園 (本庄市範囲のみ図示)
- 第2種特別地域
- 第3種特別地域
- 普通地域

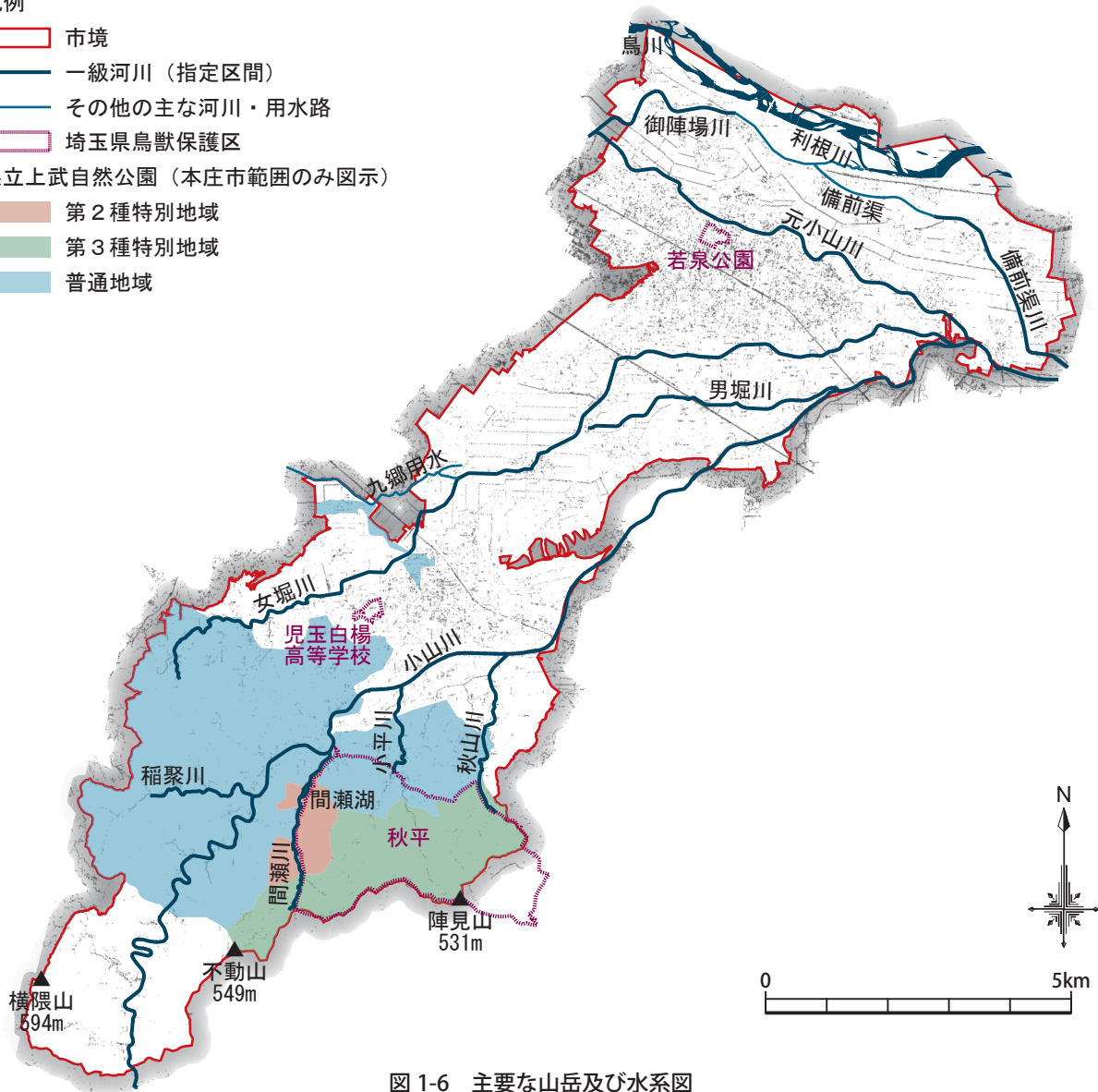


図 1-6 主要な山岳及び水系図

4) 巨木・樹林地

本計画における巨木とは、昭和 63 (1988) 年に環境庁が実施した巨樹・巨木林調査での定義「地上から 130cm の位置で幹周 (幹の円) が 301cm 以上の樹木を対象とする」に則したものを指します。金鑽神社、城山稲荷神社、八幡神社等の神社・寺院を中心に 34 か所 78 本以上が確認されており、ケヤキが最も多く、そのほかにもイチョウやクスノキ、カヤなどがあります [表 1-8]。これらの巨木は、市内の緑の中でも特に地域の象徴的な存在となっています。また、かつては、雑木林や屋敷林をはじめとする樹林地が人々の生活に欠かせない資源の生産及び採取の場として形成されてきましたが、近年は十分な管理が行き届かず、荒廃や減少傾向にあります。

表 1-8 市内で確認されている巨木

所在地	本数	樹種	所在地	本数	樹種
愛宕神社	2	ケヤキ	諏訪神社（上仁手）	1	ケヤキ
飯玉神社（長沖）	3	ケヤキ	諏訪神社（仁手）	3	ケヤキ
飯玉神社（沼和田）	6	ケヤキ、サイカチ	石神神社	2	ケヤキ、スギ
金鑽神社（千代田）	3	カヤ、ケヤキ、モミ、クスノキ	大正院	1	ケヤキ
金鑽神社（西富田）	2	ケヤキ	長泉寺	10 ≤	フジ
上若電神社	2	クスノキ	八幡大神社（宮戸）	2	ケヤキ
記述なし（児玉町）	5	ケヤキ	八幡大神社（牧西）	1	ケヤキ
記述なし（中央）	2	ケヤキ	日枝神社	1	ケヤキ
記述なし（西今井）	1	ケヤキ	藤田小学校	2	クスノキ
記述なし（本庄）	1	イチョウ	宝輪寺	2	クスノキ、カヤ
記述なし（本庄市）	2	ケヤキ	佛母寺	2	イチョウ、クスノキ
記述なし	1	ハルニレ	万年寺※	1	ケヤキ
児玉高校	2	ケヤキ	御嶽教児玉太気教会	2	ケヤキ
宗真院	1	ケヤキ	八坂神社	3	ケヤキ
正一位稲荷	2	ケヤキ	利益寺	1	イチョウ
正観寺	3	クロマツ、ケヤキ	龍清寺	1	カヤ
城山神社	3	ケヤキ	若泉稲荷神社	1	ケヤキ

【出典／環境省：巨樹・巨木林調査データベース】（※原文ママとします。）

1-6 景観

本市の特徴の一つに豊かな自然環境があります。北部の利根川沿いの平野部、南部の秩父山地に連なる丘陵地・山間部といった多様性に富んだ自然環境で構成され、間瀬湖などの湖沼や利根川・小山川などの河川、浅見山丘陵など、首都圏の中でも貴重な自然を残しています。また、市内各所から見える赤城山や浅間山、秩父山地などの美しい山並みは、本市の地域資源になっています。

2 社会的環境

2-1 人口・世帯

本庄市の人口は、令和2（2020）年10月1日時点で78,569人に及びます。近年の人口推移を見ると〔表1-9・図1-7〕、平成12（2000）年の82,670人をピークに減少へ転じ、平成27（2015）年には77,881人と15年間で約6%減少しています。令和2（2020）年には微増に転じたものの、将来推計人口を参照すると、今後も人口は減少し、2045年には約62,000人になると予想されています。これは、令和2（2020）年の人口78,569人に対して約21%減少となります。

世帯数は、増加傾向にあります。一方、1世帯あたりの人員は、昭和55（1980）年の3.67人から令和2（2020）年には2.38人と落ち込んでいます。

年齢3区分別人口の構成比を見ると〔表1-10・図1-8〕、年少人口は昭和55（1980）年以降、生産年齢人口は平成2（1990）年以降減少傾向にあります。老年人口（65歳以上の高齢者）は昭和55（1980）年以降増加傾向にあり、令和2（2020）年時点では、全体の29.3%を占め、超高齢社会（高齢化率21%超）に突入しています。

このような人口の減少と急速な少子高齢化は、既に課題となっている文化財を保存・継承する人口の減少、担い手不足の問題に深刻な影響を及ぼすと想定されます。

表1-9 人口・世帯推移（単位：人・戸）

年次	総人口	旧本庄市	旧児玉町	世帯数	人員/世帯
昭和30年 (1955)	59,876	39,527	20,349		
昭和35年 (1960)	60,117	40,992	19,125		
昭和40年 (1965)	61,296	43,032	18,264		
昭和45年 (1970)	65,187	47,116	18,071		
昭和50年 (1975)	69,294	51,090	18,204		
昭和55年 (1980)	72,089	53,531	18,558	19,652	3.67
昭和60年 (1985)	75,449	56,495	18,954	21,344	3.53
平成2年 (1990)	78,551	59,098	19,453	23,969	3.28
平成7年 (1995)	81,662	60,806	20,856	26,190	3.12
平成12年 (2000)	82,670	61,461	21,209	27,939	2.96
平成17年 (2005)	81,957	60,807	21,150	29,290	2.80
平成22年 (2010)	81,889			32,217	2.54
平成27年 (2015)	77,881			31,004	2.51
令和2年 (2020)	78,569			33,033	2.38
2025 (予測)	73,914				
2030 (予測)	71,356				
2035 (予測)	68,516				
2040 (予測)	65,356				
2045 (予測)	61,994				
2015/2000 比	94.2%				
2045/2020 比	78.9%				

【出典/人口・世帯数：国勢調査 予測人口：国土技術政策総合研究所】

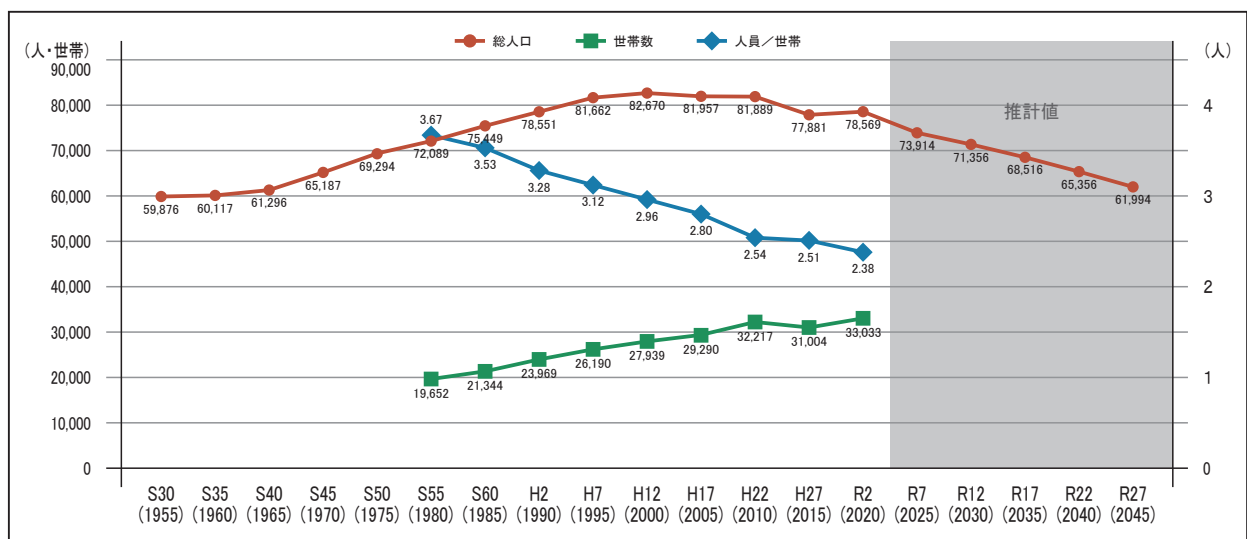
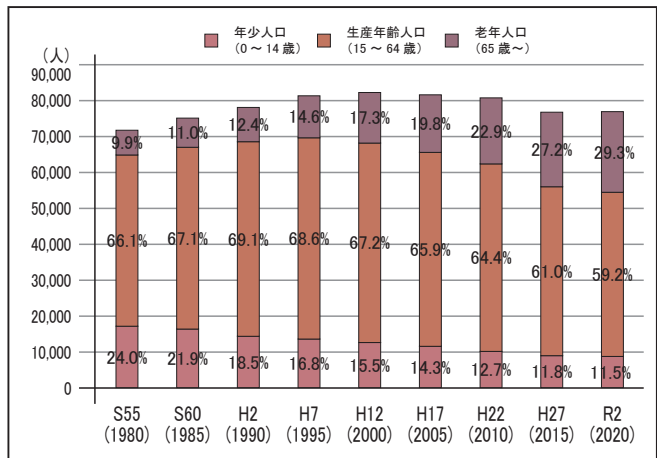


図1-7 本庄市の総人口・世帯数の推移（単位：人）

年次 (和歴)	年少人口 (0~14歳)		生産年齢人口 (15~64歳)		老年人口 (65歳以上)	
	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比
昭和55年	17,305	24.0	47,671	66.1	7,099	9.9
昭和60年	16,514	21.9	50,603	67.1	8,332	11.0
平成2年	14,500	18.5	54,168	69.1	9,752	12.4
平成7年	13,733	16.8	56,026	68.6	11,903	14.6
平成12年	12,761	15.5	55,531	67.2	14,288	17.3
平成17年	11,709	14.3	53,986	65.9	16,238	19.8
平成22年	10,293	12.7	52,199	64.4	18,592	22.9
平成27年	9,103	11.8	47,028	61.0	20,965	27.2
令和2年	8,894	11.5	45,696	59.2	22,661	29.3



※「年齢不詳」の区分があるため、各年齢区分の合計と表1-9の総人口は一致しません。【出典/国勢調査】

表 1-10・図 1-8 年齢3区分別人口の推移 (単位: 人・%)

2-2 産業

就業者総数は、平成7（1995）年以降減少傾向にあります [表 1-11・図 1-9]。就業者総数に占める産業別人口の割合を見ると、第一次産業は減少傾向にあり、現在は5%を割り込んでいます。第二次産業は平成2（1990）年をピークに減少傾向にあり、現在は約30%となります。第三次産業の占める割合が最も大きく、平成2（1990）年以降増加傾向にあり、現在は50%を大きく超えています。

表 1-11 産業別就業者数の推移

年次	第一次産業		第二次産業		第三次産業		分類不能産業		総数	
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)
昭和55年 (1980)	5,711	16.0	12,826	35.8	17,207	48.1	42	0.1	35,786	100.0
昭和60年 (1985)	4,873	13.0	14,650	39.2	17,807	47.6	56	0.2	37,386	100.0
平成2年 (1990)	4,020	10.0	16,583	41.2	19,529	48.6	94	0.2	40,226	100.0
平成7年 (1995)	3,587	8.5	16,611	39.6	21,658	51.6	130	0.3	41,986	100.0
平成12年 (2000)	2,958	7.2	16,067	39.0	21,761	52.8	417	1.0	41,203	100.0
平成17年 (2005)	2,703	6.6	14,681	36.1	22,624	55.6	684	1.7	40,692	100.0
平成22年 (2010)	2,038	5.1	12,939	32.4	21,920	54.8	3,095	7.7	39,992	100.0
平成27年 (2015)	1,836	4.9	12,258	32.6	21,374	56.9	2,087	5.6	37,555	100.0
令和2年 (2020)	1,755	4.6	12,366	32.5	22,412	59.0	1,469	3.9	38,002	100.0

【出典/国勢調査】

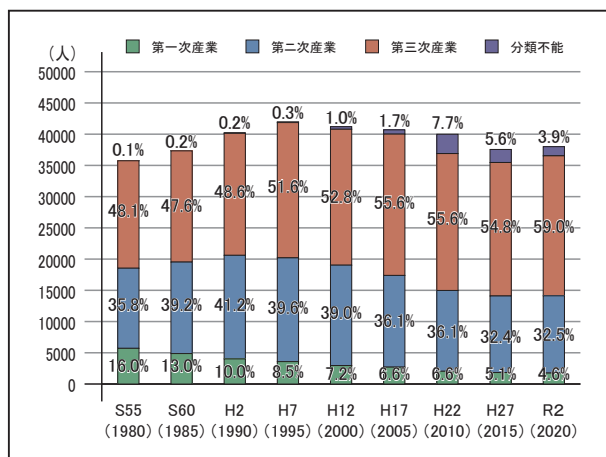


図 1-9 産業別就業者数の推移

1) 第一次産業

本市は、水と緑に恵まれた肥沃な大地に支えられた首都圏近郊型農業が盛んに行われています。特に、ねぎ、ブロッコリー、きゅうり、なす、たまねぎ等の野菜や、ポインセチア等の鉢物の産地として知られています [表 1-12]。

総農家数は、平成 22 (2010) 年まで 2,000 戸を超えていましたが、平成 27 (2015) 年に大きく減少しています。分類別では、自給的農家は、平成 12 (2000) 年より平成 22 (2010) 年まで増加傾向にありましたが、平成 27 (2015) 年には減少に転じています。販売農家は、専業農家、第一種兼業農家、第二種兼業農家の全てにおいて減少傾向にあります。経営耕地面積は平成 17 (2005) 年を底に現在まで増加傾向にあります [表 1-13・図 1-10]。全体として、農業従事者の高齢化や後継者不足、遊休農地の増加などが課題となっています。

表 1-12 農作物収穫面積の状況 (ha)

年次	稲	麦類	雑穀	いも類	豆類	工芸農作物	野菜類	花き類・花木	その他の作物	計
平成 22 年 (2010)	371	277	2	4	2	1	595	18	6	1,276
平成 27 年 (2015)	414	917	0	2	0	0	458	16	36	1,843
令和 2 年 (2020)	448	1,072	1	x	x	3	538	x	x	2,107

【出典／農林業センサス】

表 1-13 農家数・就業人口・経営耕地面積の推移

年次	農家数 (戸)					就業人口 (人)	平均年齢 (歳)	経営耕地面積 (ha)			
	専業	第1種兼業	第2種兼業	自給的	計			田	畑	樹園地	計
平成 12 年 (2000)	446	425	828	466	2,165	2,736	60.3	750	1,035	33	1,818
平成 17 年 (2005)	444	385	469	889	2,187	1,776	62.1	635	835	18	1,488
平成 22 年 (2010)	401	231	346	1,044	2,022	1,941	64.3	664	907	9	1,580
平成 27 年 (2015)	375	174	221	735	1,505	1,505	65.1	700	922	5	1,627
令和 2 年 (2020)	—	—	—	—	—	—	—	984	886	4	1,874

【出典／農林業センサス】※令和 2 (2020) 年度の統計より専業業別統計や就業人口の統計項目が削除されました。

表 1-14 製造業事業所数・従業者の推移数

年次	事業所数			従業者数
	合計	30人以上	29人以下	
平成 19 年 (2007)	181	56	125	7,876
平成 20 年 (2008)	189	58	131	7,501
平成 21 年 (2009)	164	54	110	6,853
平成 22 年 (2010)	161	54	107	6,483
平成 23 年 (2011)	164	57	107	6,470
平成 24 年 (2012)	158	56	102	6,323
平成 25 年 (2013)	155	56	99	7,304
平成 26 年 (2014)	148	57	91	7,147
平成 27 年 (2015)	—	—	—	—
平成 28 年 (2016)	161	57	104	7,124
平成 29 年 (2017)	145	60	85	7,091
平成 30 年 (2018)	143	61	82	7,430
令和元年 (2019)	143	58	85	7,431
令和 2 年 (2020)	138	56	82	7,129

【出典／工業統計調査】

※平成 27 (2015) 年は国勢調査実施年のため、工業統計調査実施なし。

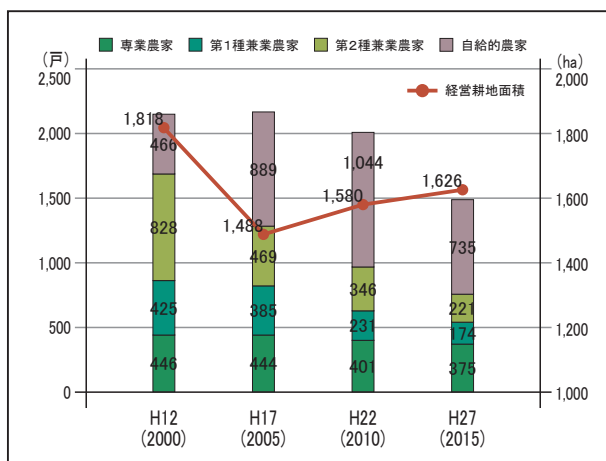


図 1-10 農家数・経営耕地面積の推移

2) 第二次産業

本市では、戦後、積極的に工業団地が造成され、電気・機械などの工業誘致が進みました。近年では、関越自動車道やJR高崎線等の利便性を生かした先端技術等の製造業が基幹産業として位置づけられ、都市の魅力と田園風景が調和した田園都市が形成されつつあります。

工業事業所数は、平成20(2008)年をピークに減少し、平成28(2016)年に一旦増加に転じたものの、現在まで再び減少傾向にあります。従業者数は、平成24(2012)年まで減少が続いたものの、平成25(2013)年に大幅な増加に転じ、以降は7,000～7,500人を推移しています〔表1-14・図1-11〕。

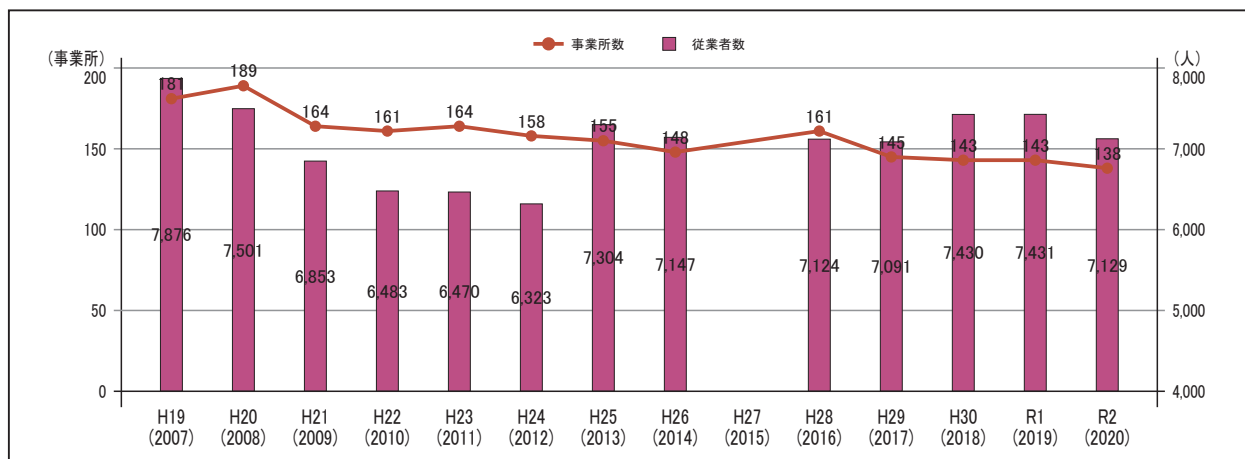


図 1-11 製造業事業所数・従業者の推移数

3) 第三次産業

本庄地域市街地や児玉地域市街地は、かつて街道によって栄えた地域です。現在は、ホテルやマンション、オフィスビルなどが建ち、大手食料品店をはじめとする大型店舗が立地するなど、周辺市町の商業の中心となっています。

商業事業所数は、平成11(1999)年から平成26(2014)年まで減少傾向が続きましたが、平成28(2016)年に増加の兆しが見えます。従業者数は、平成11(1999)年から平成24(2012)年まで減少傾向にありましたが、平成26(2014)年には大きく増加に転じています〔表1-15・図1-12〕。

表 1-15 商業事業所数・従業者数の推移

年次	事業所数			従業者数
	合計	卸売業	小売業	
平成11年 (1999)	1,186	203	983	7,077
旧本庄市	915	161	754	5,519
旧児玉町	271	42	229	1,558
平成14年 (2002)	1,094	178	916	6,568
旧本庄市	853	141	712	5,120
旧児玉町	241	37	204	1,448
平成16年 (2004)	965	156	809	6,299
旧本庄市	746	122	624	4,907
旧児玉町	219	34	185	1,392
平成19年 (2007)	925	140	785	6,244
平成24年 (2012)	670	—	—	4,685
平成26年 (2014)	632	122	510	5,685
平成28年 (2016)	685	123	562	6,067

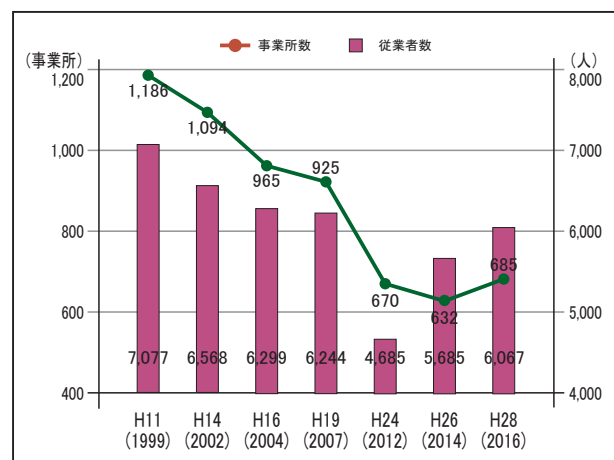


図 1-12 商業事業所数・従業者数の推移

【出典／商業統計調査、平成24年のみ経済センサスー活動調査】

2-3 観光客数

東京から80km圏、上越・北陸新幹線の本庄早稲田駅と関越自動車道の本庄児玉ICを有する交通の便があり、歴史文化をはじめ、祭り、イベント、花めぐり、体験スポット、グルメ、特産品などを生かした観光振興に取り組んでいます。

過去10年間の観光客数を見ると、平成26(2014)年の大幅な減少で70万人を割り込みましたが、翌27(2015)年から増加傾向にあり、平成28(2016)年以降は70万人超で推移しています。令和2(2020)年以降は新型コロナウイルス感染症のまん延に伴い、イベント等の中止によって観光客数が激減し、観光客数は約半数に落ち込んでいます[表1-16・図1-13]。

表1-16 年間観光入込客数(延べ人数)

年次(和暦)	観光地点	イベント	合計
平成24年	484,294	274,500	758,794
平成25年	473,575	258,100	731,675
平成26年	378,712	235,000	613,712
平成27年	395,034	261,800	656,834
平成28年	428,487	271,700	700,187
平成29年	436,719	264,400	701,119
平成30年	447,471	275,300	722,771
令和元年	435,110	288,940	724,050
令和2年	349,608	12,800	362,408
令和3年	370,985	27,600	398,585

【出典/埼玉県産業労働部観光課】

※「観光地点」は当該市町村内にある観光施設、「イベント」は祭りなどのイベントの入込客数を合計したものとします。

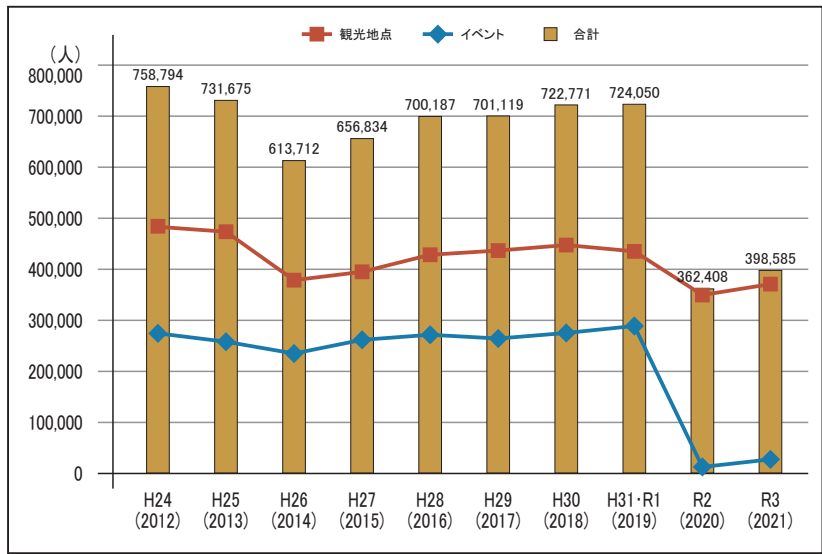


図1-13 年間観光入込客数

2-4 土地利用

本庄駅北口周辺や児玉駅周辺には古くからの市街地が立地しています。近年は、本庄早稲田駅周辺地域において若い世代を中心に着実に人口が増加しており、良好な市街地が形成されています。

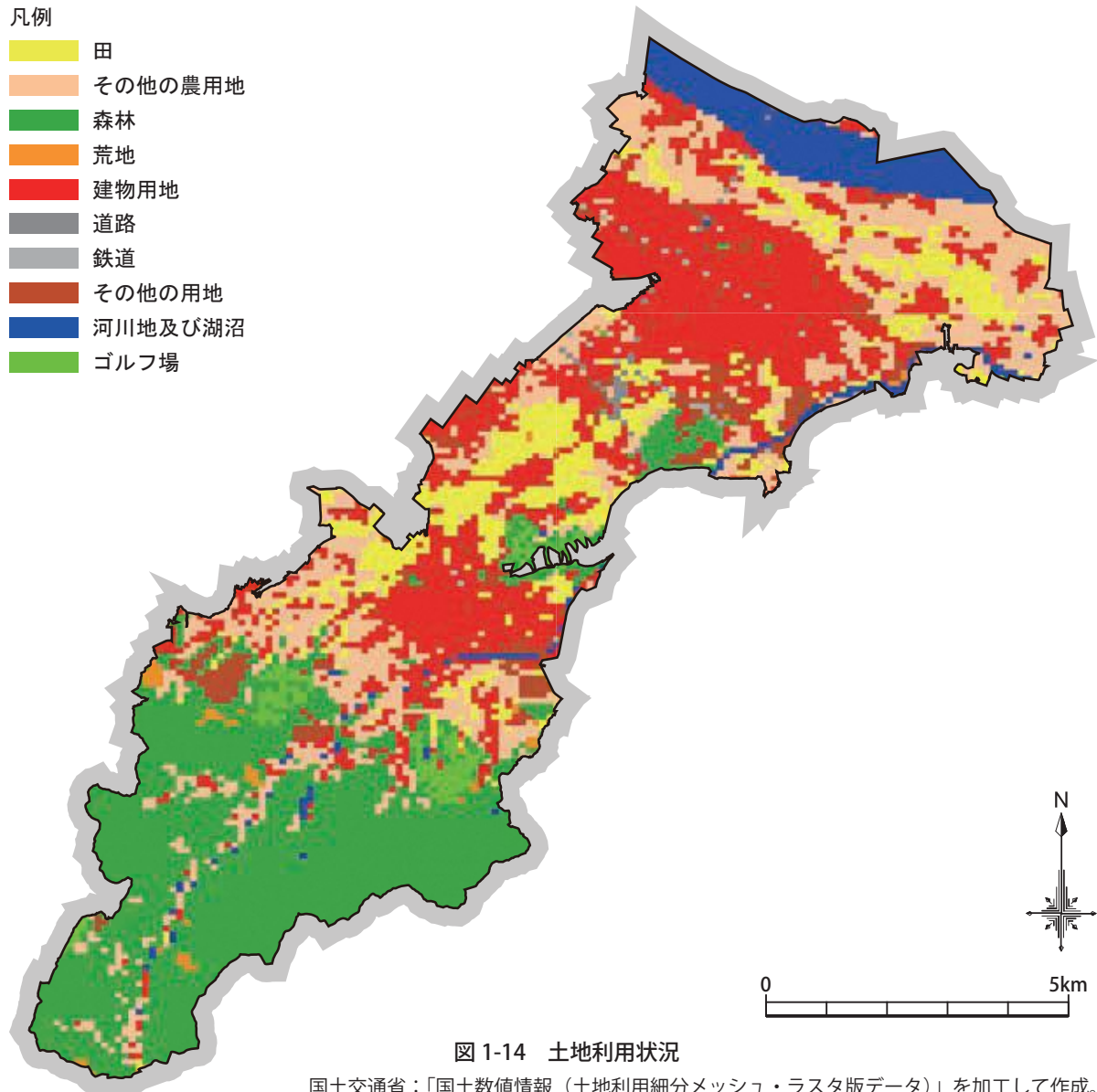
一方、農地は、北部や中部をはじめとして市域全体に広がっています。農業は、本市の地域産業としての役割を果たすとともに、郷土を特徴づける景観や文化を生み出してきました。

このほかにも、本市南西部に所在する陣見山をはじめとする森林や里山、北部の利根川をはじめとする河川など、市域には多様に富んだ自然環境が存在します[表1-17・図1-14]。

表1-17 地目別面積

地目	総面積	田	畑	宅地	池沼	山林	原野	雑種地
面積 (ha)	8,969	771.0	1,613.2	1,598.5	7.4	1,543.5	131.5	520.5

【出典/埼玉県統計年鑑 令和2(2020)年】 ※地目は代表的なものとするため、合計は総面積となりません。



2-5 交通

市域には JR 高崎線、八高線、上越・北陸新幹線、関越自動車道、国道 17 号・254 号・462 号などが通っています。東京―埼玉―群馬、そして上信越、北陸方面を結ぶ交通網の結末点にある本市は、ヒトやモノが集まる交流拠点としての特性を持っています [図 1-15]。

平成 16（2004）年 3 月に上越新幹線本庄早稲田駅が開業したことによって、東京駅からの所要時間は約 50 分に短縮しました。本庄早稲田駅前には早稲田大学を中心に教育・研究施設が整備され、国際化にも対応したゆとりと魅力ある地域づくりが進められています。

平成 23（2011）年 3 月には、群馬・栃木・茨城の 3 県をつなぎ、都心から 100～150km 圏を環状に連結する関東大環状の一部を構成する北関東自動車道が全線開通となりました。東北自動車道、関越自動車道、常磐自動車道が接続されたことにより、首都圏・北陸地方・東北地方の交流が進むことが期待されています。

市内での移動における交通機関としては、民間企業 3 社がそれぞれ路線バスを運行しているほか、本庄駅（JR 高崎線）と本庄早稲田駅（上越・北陸新幹線）間を定期運行するシャトルバス、予約を受けて運行するデマンドバスがあります。

凡例

- 市境
- 高速道路
- ▼ 国道
- 新幹線
- 鉄道（在来線）
- 駅／インターチェンジ

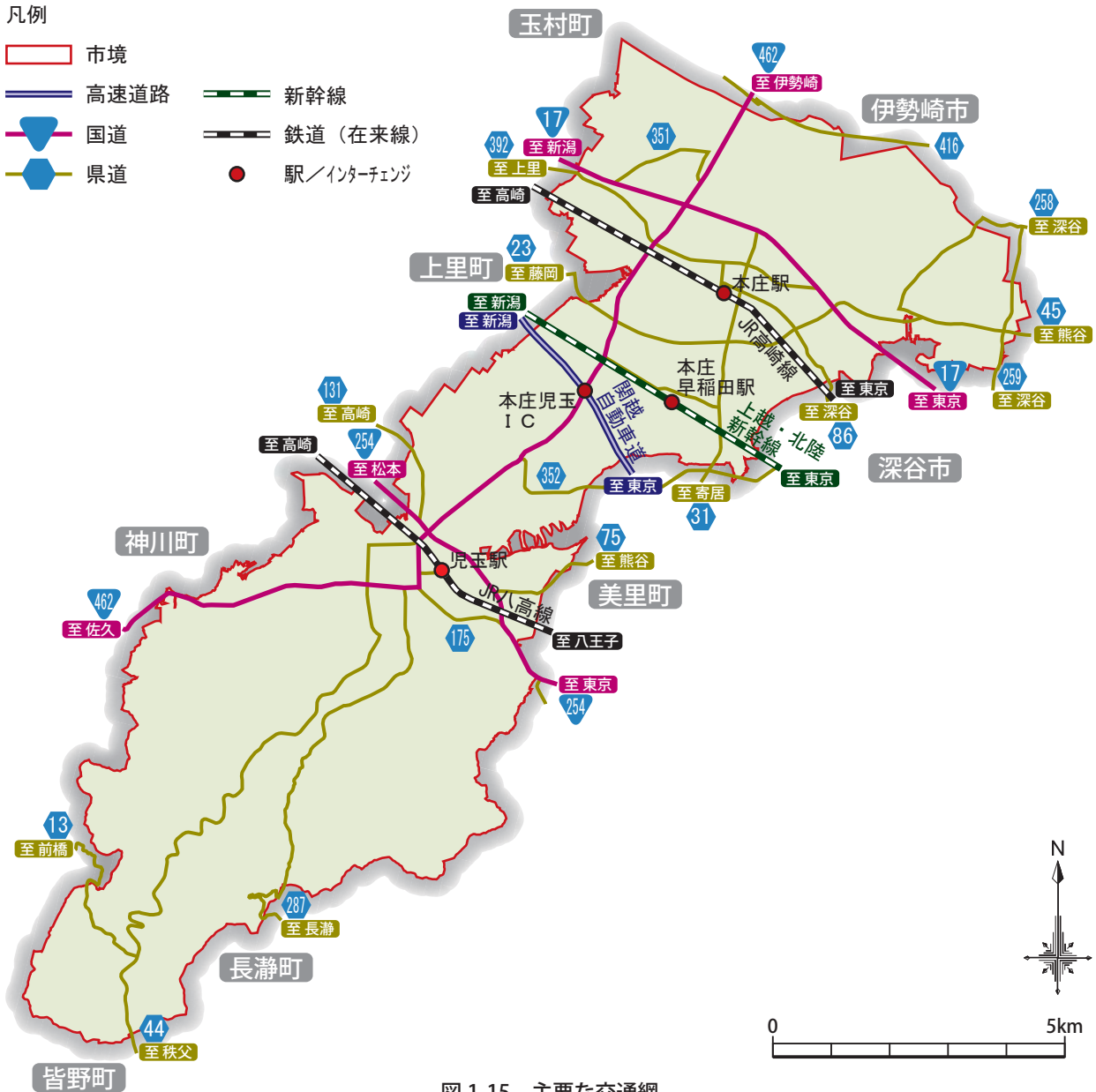


図 1-15 主要な交通網

2-6 文化財関連施設

市が管理する社会活動施設（博物館・資料館・文化施設・図書館・市民活動施設 ※公民館を除く）、産業施設（観光施設など）、文化財収蔵庫を〔表 1-18〕に整理します。

表 1-18 本庄市文化財関連施設一覧

No.	名称	種別	所在地	施設概要
1	本庄早稲田の杜ミュージアム	博物館	西富田 1011	本庄市と早稲田大学が所蔵する文化財を共同で展示する施設。市内出土の考古資料や映像、年表から本庄市の歴史をたどるほか、早稲田大学の貴重な収蔵品を企画展示。
2	競進社模範蚕室	資料館	児玉町児玉 2514-27	木村九蔵が明治 27（1894）年に建設した養蚕伝習専用の蚕室。内部に養蚕業を紹介する展示。県指定有形文化財。
3	塙保己一記念館 （アスピアこだま内）	資料館	児玉町八幡山 368	塙保己一の遺品及び関係資料（県指定有形文化財）を収蔵展示し、保己一の残した偉業について紹介。
4	本庄市民文化会館	文化施設	北堀 1422-3	市民文化の向上、住民福祉の増進を図るための施設。コンサート等の催し物、会議などで幅広く利用。

No.	名称	種別	所在地	施設概要
5	本庄市児玉文化会館 (セルディ)	文化施設	児玉町金屋 728-2	児玉文化会館・児玉中央公民館・市立図書館児玉分館の機能を持った複合施設。
6	本庄市立図書館	図書館	千代田4丁目 1-9	1階に「おはなしコーナー」、3階に多世代交流室を設け、幅広い年代層の利用に配慮する。
7	本庄市立図書館児玉分館	図書館	児玉町金屋 728-2	本庄市児玉文化会館（セルディ）内に設置。
8	本庄市市民活動交流センター (はにぼんプラザ)	市民活動施設	銀座1丁目 1-1	7つの機能を持つ市民活動交流施設。本庄まつりの前後（8～1月）、展示ホールで山車の展示を実施。
9	本庄市あさひ多目的研修センター	市民活動施設	沼和田 1005	研修室、多目的ホール、調理室があり、市内在住・在勤者が利用。
10	旧本庄商業銀行煉瓦倉庫	市民活動施設	銀座1丁目 5-16	担保の繭や生糸を保管する倉庫として明治29（1896）年建築。1階は交流・展示施設、2階は多目的ホールとして使用。国登録有形文化財。
11	本庄市観光農業センター	観光施設	児玉町小平 653	地元農産物やハンドメイド品などを販売、そば打ち体験、バーベキュー、レンタサイクルなどが体験できる。
12	本庄市ふれあいの里いずみ亭 (地域資源活用総合交流促進施設)	観光施設	児玉町河内 209-1	児玉地域南部に位置する本泉地区の自然環境を生かした地域活性化、農林水産物の展示直売、都市との交流促進などを目的とした施設。
13	本庄市インフォメーションセンター (テラスバ本庄)	その他	駅南2丁目 1-4	JR高崎線「本庄駅」にある観光案内所。市内の情報発信や土産品の販売を行う。
14	旧本庄警察署前収蔵庫	文化財収蔵庫	中央1丁目 2-2	収蔵庫、歴史資料及び報告書等の収蔵
15	旭民具収蔵庫	文化財収蔵庫	都島 904-1	収蔵庫、民具の収蔵
16	太駄文化財収蔵庫	文化財収蔵庫	児玉町太駄 352	収蔵庫、考古資料の収蔵
17	蛭川文化財収蔵庫	文化財収蔵庫	児玉町蛭川 915-12	収蔵庫、考古資料の収蔵
18	下浅見文化財収蔵庫	文化財収蔵庫	児玉町下浅見 867-11	収蔵庫、古文書の収蔵

令和5（2023）年4月より利用開始の施設追加

19	児玉文化財収蔵庫	文化財収蔵庫	児玉町児玉 391	収蔵庫、考古資料の収蔵
----	----------	--------	--------------	-------------

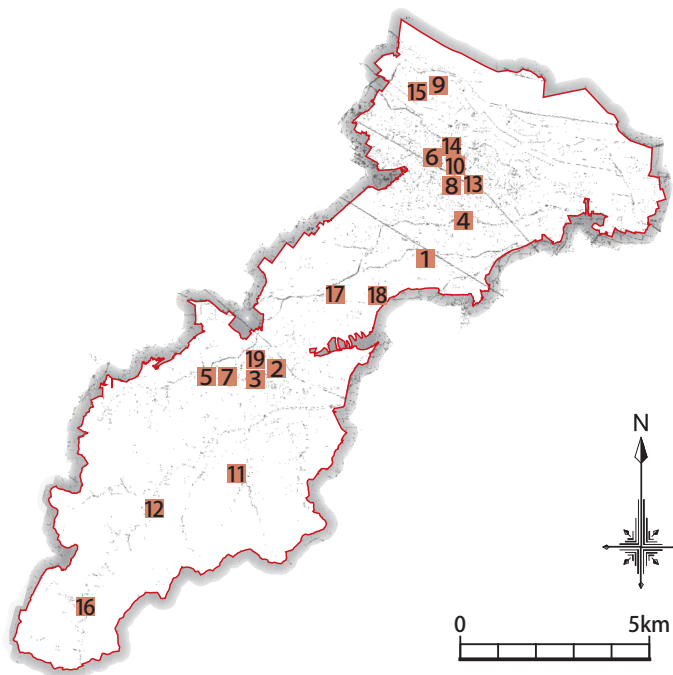


図 1-16 本庄市文化財関連施設 位置図

※図上の番号は表 1-18 の「No.」欄と整合します。



写真 1-1 埴保己一記念館
(アスピアこだま内)



写真 1-2 本庄市市民活動交流センター
(はにぼんプラザ)

3 歴史的環境

注 本項では、本市に所在する指定等文化財に関わる文言を太字で示します（但し、文脈の都合上、指定等文化財の正式な名称とは一致しません）。

3-1 原始（旧石器・縄文・弥生時代）

●社会・生活

本庄市域での人類の活動開始時期は、旧石器時代にまで遡ります。浅見山丘陵の浅見山 I 遺跡で発掘された黒曜石の石器群は、約2万年前と推定され、本庄市内では最も古い人類の遺物の一つです。

縄文時代は、日本列島で人々が土器を使い始めた時代で、その始まりは今から1万6,000年ほど前に遡ります。本庄市内でも浅見山 I 遺跡や宍勝寺北裏遺跡、長沖古墳群梅原地区遺跡などで縄文時代草創期の土器片が確認されています。縄文時代前期になると、児玉丘陵を中心に、人々の定住を示す竪穴住居跡を伴った集落遺跡が増えてきます。温暖化によりクリやドングリなどの植物が増え、食料の確保が容易になったことが人口の増加につながったと考えられています。縄文時代中期に入ると、本庄台地上にも集落の進出が認められるようになります。特に、現在の児玉工業団地内で確認された将監塚、古井戸、新宮の3遺跡は、いずれも直径約200mもある大規模環状集落です。続く縄文時代後期や晩期になると、丘陵上の集落が減少し、本庄台地上の環状集落も縮小するなど、遺跡の減少が顕著になります。

弥生時代は、大陸から稲作や金属器の文化が北海道を除く日本列島の各地に伝わり、本格的な農耕社会に移行した時代とされています。本庄市域に弥生文化が波及した時期は、確認できる限り紀元前3世紀頃とやや遅く、弥生時代中期になってからのことでした。集落遺跡はまだ見つかっていませんが、浅見山 I 遺跡では、墓と推定される土坑が発見されています。弥生時代後期になると、浅見山丘陵や児玉丘陵で谷筋の水田化が進み、山根遺跡、真鏡寺後遺跡などの小規模な集落が展開するようになります。

3-2 古代

1) 古墳時代

●社会・生活

古墳時代に入ると、集落遺跡の分布から、女堀川流域に広がる低地帯の開発が進み、集落も増えて、人口が急速に増加した様子が見えられます。古墳時代前期には、生産力の向上を背景にして鷺山古墳をはじめとする前方後方墳、前山1号墳などの前方後円墳、北堀新田前2号墓などの前方後方形周溝墓が造られました。

古墳時代中期初頭（4世紀後半）には、石製模造品の優品を出土した万年寺つつじ山古墳をはじめとする方墳や、箱形石槨が検出された万年寺八幡山古墳などの円墳が現れるようになります。やがて中期中頃（5世紀前半）になると、金鑽神社古墳や生野山将軍塚古墳、公卿塚古墳のような直径60mを超える大型円墳が相次いで造られるようになりました。この頃には、女堀川周辺ばかりではなく台地の開発も進み、二本松遺跡や夏目遺跡、夏目西遺跡、薬師堂東遺跡など新たな集落が形成されています。この頃の集落遺跡からは、鉄器生産に関する資料を出土する住居跡も発見されていることから、新しい技術を携えて遠方から移入してきた人々がいたことがうかがえます。

古墳時代後期になると、横穴式石室の普及や副葬品の組合せの変化、多種多様な形象埴輪の出現など、古墳の様相が大きく変化します。秋山庚申塚古墳からは、金銅製馬具をはじめとする多くの副葬品が検出されています。また、小島前の山古墳からは盾持人物埴輪、御手長山古墳からも人物埴輪が出土しています。

古墳時代中期末（5世紀第4四半期）から終末期（7世紀）にかけて、西五十子古墳群、塚本山古墳群、長沖古墳群、秋山古墳群など数十から100基以上の数の古墳からなる群集墳が形成されるようになります。中でも長沖古墳群は、総数200基を超える埼玉県内最大規模の群集墳として知られています。

●産業・生産

古墳時代後期（6世紀）から終末期（7世紀）にかけての集落遺跡は、中期に続いて女堀川流域や本庄台地北縁を中心に広く分布します。それらの中には、7世紀中頃のガラス小玉^{いがた}鑄型を大量に出土した薬師堂東遺跡のように、特殊な手工業製品の生産に関わった集落も認められます。なお、古墳時代終末期の後半になると、従来の集落立地に変化が生じ、伝統的な集落が解体・再編される一方で、台地上に新たな大規模集落が作られるようになります。

2) 奈良・平安時代

●統治・政治

奈良時代に入ると、本庄市域の大部分は、武蔵国児玉郡^{むさしのくに}に編入されました。この頃には、律令制度の定着とともに地方の行政組織も整備されたことで、文字の普及が進みました。本市の遺跡からも文字が記された石製紡錘車^{せきせいぼうすいしゃ}が出土しており、薬師元屋舗遺跡から出土したものには「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂^{くさたごうこしゅ}」の線刻文字が、枇杷橋遺跡^{びわばし}の資料には「武蔵国児玉」の線刻文字が記されています。さらに、山崎上ノ南遺跡からは宝亀2（771）年に檜前部名代女^{ひのくまべのなしろめ}に貸し付けた出挙^{すいこ}の利稻四十束の収納を税長大伴国足^{おおとものくにたり}が確認したという内容が記された寶龜二年銘木簡^{ほうき}が発見されています。

●産業・生産

山崎上ノ南遺跡のある金屋地域^{かなや}（飯倉^{いいぐら}）の谷筋には、国分寺創建期の瓦を生産した飯倉窯跡^{かなくさ}や金草窯跡、製鉄遺構、炭窯などの各種生産関連遺跡が集中し、当地に古代児玉郡の官営工房が所在したことが想定されます。また、市域を流れる神流川から分水された九郷用水^{くごうようすい}が整備されたのも奈良時代と考えられています。条里制^{じょうりせい}の施行に伴い、九郷用水を幹線水路として、女堀川周辺には四方田条里^{しほうでん}、今井条里^{いまい}、児玉条里などと呼ばれる条里水田が整備されていきました。

●社会・生活

奈良時代の集落の形態は、条里水田に接する台地上に大規模な集団を形成して多人数で集住する傾向が顕著になります。これは、条里制に伴う水田区画の整備とともに集落も計画的に配置されたためと推定されます。一方で、平安時代に入ると、律令制度の弛緩とともに大規模集落は徐々に分散していき、10世紀にはほぼ解体されました。また、この頃には住居形態の変化とともに、検出される竪穴住居も数を減らし、11世紀になると古代の集落は、遺跡としてほぼ痕跡を残さなくなります。

●信仰・祭礼

奈良・平安時代には、地域の有力者による私営の寺院が造営されるようになります。東小平中山廃寺^{ひがしこいだいらなかやまほじ}は堂塔伽藍^{どうとうがらん}を持った寺院で、国分寺創建期の瓦や仏像^{らぼつ}の螺髪^{らぼつ}が出土しました。

3-3 中世

1) 平安時代末期～鎌倉時代

●統治・政治

平安時代末期になると、関東各地で武士団が形成されるようになり、武蔵国において「武蔵七党」と総称される武士団が形成されました。その一つに、武蔵国北部で誕生した児玉党と呼ばれる武士団があります。児玉党は、阿久原牧^{あくはらのまき}（児玉郡神川町）や児玉荘という荘園を経済的基盤とした武士団で、本庄市内の本庄^{くげつか}・久下塚^{くくさづか}・四方田^{もくさい}・牧西^{こうち}・河内^{ひるがわ}・蛭河（川）^{しおや}・今井^{いまい}・塩谷^{しおや}・児玉^{ましも}・真下など所領の地名を名字の地としました。

児玉党の所領は、九郷用水の流末や生野山丘陵の南側、あるいは扇状地の広い後背地を控えた児玉地域の丘陵地に広く分布しており、主に九郷用水かんがい区域の周辺地域を中心に支配していたことがう

かがえます。また、本泉地区の河内寺山廃寺からは、堂宇の四隅に垂下される風鐸が出土しました。このことから、格式ある寺院の存在や、同地を拠点にしていた児玉党河内氏との関係が推定されます。この時期の児玉党の活動は九条兼実の日記『玉葉』に、安元元（1175）年に児玉庄が上野国高山御厨を押領して訴えられた記事があります。児玉党は上野国西部にも一族を分派していますが、このような事件も児玉党の上野国進出と何らかの関係があるのかもしれませんが。

●信仰・祭礼

鎌倉時代を通じて板石塔婆（板碑）が数多く造立されました。本泉地区（元田）には、全国でも稀な大型の板碑が残っています。正嘉2（1258）年銘を持つ三連板碑で、高さが200cm余り、幅は116cmもあり、相当な有力者によって造立されたものと推定されます。また、児玉地区（児玉）の玉蓮寺には、児玉党武士の児玉時国と日蓮上人の逸話が伝承され、墓地に嘉元2（1304）年銘の大型の板碑があることから、同寺と児玉党との関係がうかがえます。

板碑以外にも、市内には石造物が多く残されています。秋平地区（小平）のほてい堂には、鎌倉時代の造立と考えられる大型の五輪塔2基があります。北泉地区（栗崎）の宥勝寺も児玉党との関係の深い寺院であり、墓地に一の谷合戦で討ち死にした荘小太郎頼家の供養塔が残されています。さらに、共和地区（蛭川）の釈迦堂墓地には、一の谷合戦で庄四郎高家に生け捕られた（『平家物語』）三位中将重衡の首塚が残されています。このほかにも、宝治元（1247）年の自然石塔婆（藤田地区（小和瀬））や乾元2（1303）年の円形光背を持つ凶像板碑（金屋地区（保木野））などが残っており、武蔵武士の熊野信仰の隆盛が認められます。

●交通・経済

児玉地域市街地を鎌倉街道上道が縦貫しています〔図1-17〕。『曾我物語』に児玉宿の記述があり、生野山南側に古い宿場があったものと思われます。児玉地区（児玉）にある貫相寺の本尊「木造阿弥陀三尊像」は、戦国時代に雉岡城主夏目豊後守定基の勧めにより生野山より移したものと寺伝で伝えられています。

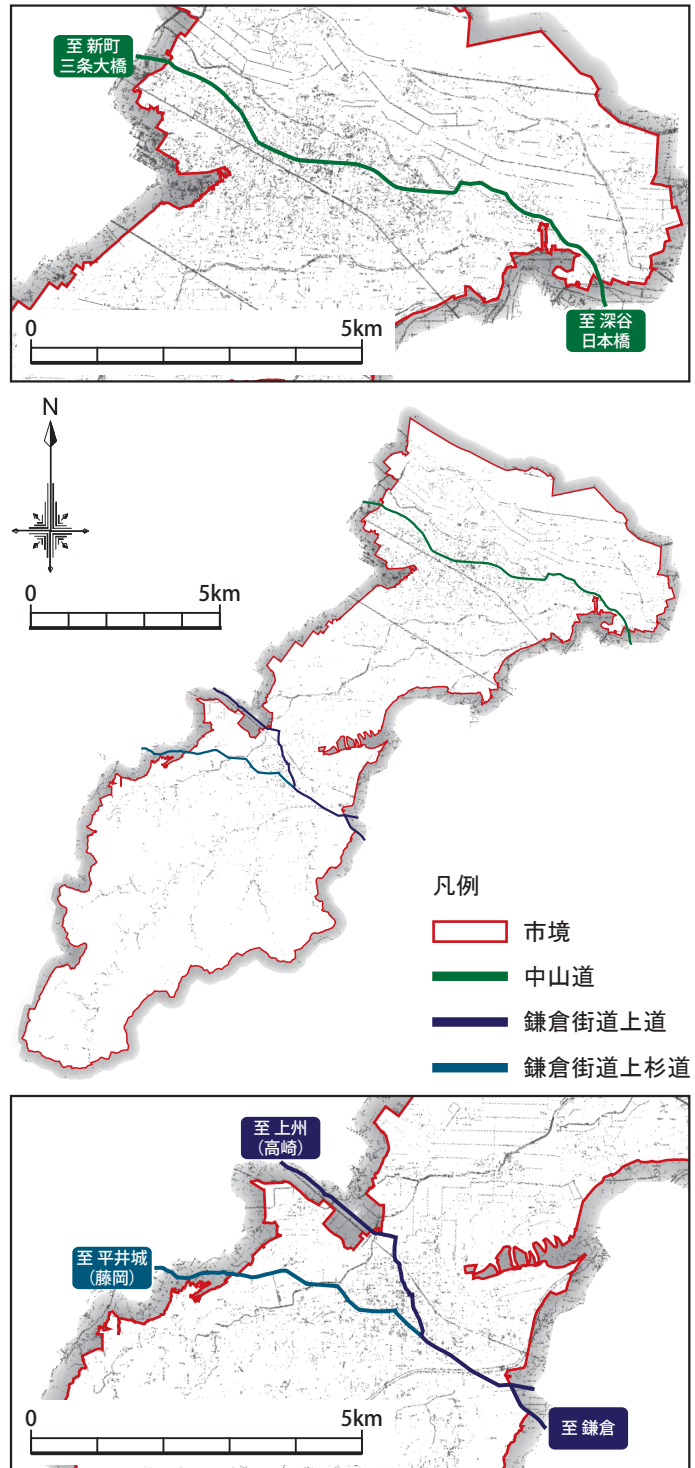


図1-17 主要な街道（中山道・鎌倉街道上道）

※各街道の道筋は以下の資料を参照しました。

- ・埼玉県立歴史資料館：『鎌倉街道上道（歴史の道調査報告書 第1集）』（1983.3）
- ・埼玉県立博物館：『中山道（歴史の道調査報告書 第5集）』（1986.3）

2) 南北朝・室町時代～戦国時代

●統治・政治

南北朝の動乱期を経た室町時代の市域は、関東管領山内上杉氏とその家宰職であった長尾氏との関係が強い地域です。児玉地区の独立丘陵上には、関東管領山内上杉顕定によって**雉岡城**が築城されました。この場所にはかなり早い時期から武士の館が設けられていたと考えられていますが、城として整備されたのは室町時代末期頃と推定されています。その後、家臣の夏目豊後守定基が城主となりました。

この時代の関東各地は度々戦乱の場となり、この地域においても長禄元（1457）年に古河公方に対抗して五十子陣が築かれました。雉岡城は、鎌倉街道上道と上杉道の分岐点の内側という交通の要所に位置していたことから、五十子陣と同様に上杉方の重要な拠点であったと考えられます。

やがて戦国時代後半になると、関東管領上杉憲政が越後の長尾景虎（上杉謙信）を頼って越後に逃れたことで、関東の多くは後北条氏の勢力下に入りました。弘治2（1556）年には、本庄地区の北部段丘上に本庄実忠によって**本庄城**が築かれました。本庄氏は、児玉党本庄氏の後裔と思われます。本庄氏も当初は関東管領上杉氏の配下でしたが、後北条氏の武蔵進出に伴い、後北条氏の勢力下に組み込まれました。

戦国時代の当地の様子を伝える資料として戦国大名が発給した朱印状や判物等の文書が残されています。永禄4（1561）年の河越合戦の様子を伝える**福田家中世文書**や、永禄12（1569）年と翌年に出された武田家高札と北条家制札（**長泉寺中世文書**）は、武田氏の武蔵侵略と後北条氏の動静を今に伝えています。

●産業・生産／芸術・交通

天正15（1587）年の北条氏邦朱印状（**鈴木家中世文書**）には、この地域の重要な用水路である九郷用水の記述が見られ、戦国時代の様子を伝えています。

また、金屋地区には室町時代に鋳物師集団が発生し、この時期の作品が残されています。北条氏は、金屋地区の鋳物師に伝馬手形（**倉林家中世文書**）を発給して交通の整備と組織化を行いました。

●信仰・祭礼

戦国時代になると板碑の造立は大幅に減少し、やがて造られなくなりました。一方で、生前に自らの冥福を祈る逆修のための供養塔や墓石として五輪塔や宝篋印塔、石幢などの石造物は引き続き造立されました。市内各地には、戦国時代の五輪塔や宝篋印塔が残されています。秋平地区（小平）の成身院には、戦国時代の歴代住職の五輪塔があります。秋平地区（秋山）にある室町時代の**六面重制石幢**は、秩父郡から児玉郡、上野国までの範囲に広く分布する形式の一例として注目されています。北泉地区（西五十子）には、文明元（1469）年銘の**石造十一面観音坐像**があり、銘文にある「道德」は『松陰私語』の作者の松陰西堂のことといわれています。

●人物

戦国時代末期、天正18（1590）年に豊臣秀吉が小田原攻めを行うと、後北条方であった雉岡城と本庄城は相次いで落城し、やがて小田原城も開城して後北条氏は滅亡しました。翌天正19（1591）年に秀吉は大規模な国替えを実施し、徳川家康を関東に転封させました。家康は、関東各地に家臣を配置して領国支配を行い、雉岡城には松平清宗・家清父子が、本庄城には小笠原信嶺が配置されました。また、各地で検地を実施しており、児玉村や宮戸村には天正19（1591）年の検地帳が残されています。

3-4 近世（江戸時代）

●統治・政治

後北条氏の滅亡から徳川家康の関東入国をもって、近世（江戸時代）という新しい時代へ移っていき、本庄の地も変革を遂げることになります。

本庄城に配置された小笠原信嶺は、本庄宿内に菩提寺の開善寺を開き、小笠原氏と極めて深い関係にある清拙正澄の画を納めました。なお、開善寺は、武田信玄との関係も深く、**信玄公画**も所蔵しています。信嶺は、慶長3（1598）年に没し、開善寺に葬られ、現在、**信嶺夫妻の墓**が並んで建っています。信嶺の後は養子の信之が跡を継ぎましたが、慶長17（1612）年に下総国古河城へ転封となり本庄を去り、慶長19（1614）年に古河城にて没し開善寺に葬られました。現在でも**信之の墓**が同寺に残っています。

雉岡城には、松平清宗・家清父子が入城したものの、清宗が間もなく亡くなったため家清が城主となりました。なお、この頃の雉岡城は、八幡山城と呼ばれたようです。家清によって城下の整備が始められていましたが、家清が関ヶ原合戦の翌年の慶長6（1601）年に三河国吉田（愛知県豊橋市）に転封となり、以降、雉岡城は廃城となりました。

●交通・経済

家康は、支配力強化の一環として五街道の整備を実施しました。その一つとして、本庄地域を通過する中山道が整備されました〔図1-17〕。中山道の開通により本庄宿が成立し、宿には本陣・脇本陣が整備されました。現在、二つの本陣の一つ**田村本陣の門**が残されています。

一方、児玉地域では中山道脇往還川越道が児玉地区内の八幡山と児玉の二町を通り、江戸時代には二町があたかも一町のごとく家並みが連続していました。現在でも、児玉地区の八幡神社には、街道の中央に置かれていたという**高札場**が残されています。

●信仰・祭礼

本庄宿の整備・発展に伴い、寺社も造営されました。本庄宿西端の**金鑽神社**は、小笠原信嶺の孫で宿城主の小笠原忠貴（政信）によって社殿が建立され、その**寄進状**が残されています。このほかにも、金鑽神社の別当寺である威徳院の**大門**も残されています。**安養院**は、東富田村にあった安養庵が本庄宿に移されたもので、**総門・山門・本堂**が建立によって伽藍が整備されていきました。**円心寺**は、二代城主の小笠原信之が父の供養のために開いた円心坊を起源とし、後に豪華な**鐘楼山門**が建立されました。

一方、児玉地域では、鎌倉街道上道沿いに所在する**八幡神社**の**社殿**と**青銅製の鳥居**が享保期（1716-1736）に造立されたほか、宝暦期（1751-1764）に**隨身門**、寛保期（1741-1744）に**能楽殿**が整備されました。なお、八幡神社は、永承6（1051）年に源義家によって児玉地区（八幡山）に勧請されたと伝わるもので、雉岡城の築城を機に現在地へ移されたと考えられています。八幡神社には、近代に作成された**能面**や**能装束**も残されています。

金屋地区（金屋）の天龍寺には、宝永8（1711）年に金屋鋳物師によって作られた**銅鐘**が残っています。秋平地区（小平）には、さざえ堂と呼ばれる独特な建築様式で造られた**成身院百体観音堂**があります。この仏堂は、天明3（1783）年の浅間山大噴火の犠牲者の供養を目的に建立されました。

また、市内各地に獅子舞が伝えられ、**台町の獅子舞**や**小平の獅子舞**、さらに**仁手諏訪神社の獅子舞**、**今井金鑽神社の獅子舞**、**吉田林の獅子舞**は今でも継承されています。

●芸術・工芸

本庄宿では、芸術や文化が発展し、多くの文人が活躍しました。俳句の世界では、本庄宿の豪商戸谷半兵衛（中屋）が俳人として活躍するだけでなく、俳句宗匠を援助するなど文化面で大きく貢献しました。児玉出身の春秋庵系の俳人久米逸淵は、高崎で活躍した後、江戸へ出て活動しました。晩年は本庄宿へ移り、没後郷里の児玉町の玉蓮寺に葬られました。同寺の墓地には、逸淵の墓と句碑が残されています。

絵画の分野では、武正南盧たけまさなんろや上州島村出身の金井烏州かない うじゅうらが活躍し、貴重な作品を残しました。また、地元出身の刀鍛冶長谷部若狭守国治はせべ わかさのかみくに はるが作刀した大正院の不動剣だいしょういんや短刀が市内に残されています。

地元の文人だけでなく、交通量の増大でにぎわった本庄宿には多くの文人が行き交い、本庄宿の人々と交流を持ちました。料亭紅葉屋を営んだ小倉紅おぐらこうおは、交流を持った多くの文人達の遺墨を石に刻み、墓碑（小倉家の墓碑群）として残しました。

●人物

延享3（1746）年に武蔵国児玉郡保木野村で生まれた塙保己一はなわほきいちは、7歳で失明し、15歳で江戸に出て当道座とうどうざに入門し、晩年には総検校そうけんぎょうに昇進しました。盲目の国学者としても有名で『群書類従』の編纂や和学講談所の設立など多大な業績を残しました。郷里には生家である塙保己一旧宅があるほか、遺品と関係資料が塙保己一記念館で展示されています。

3-5 近代・現代（明治時代～昭和時代）

●交通・経済

幕末期の安政6（1859）年、我が国は長く続いた鎖国政策を解き開国し、横浜よこはまを開港しました。諸外国との貿易が始まった当初の我が国の主要な輸出品は生糸きいとと蚕種さんしゆでした。生糸と蚕種が高値で取引されると、当然ながら養蚕業ようさんが脚光を浴びることになり、繭まゆから糸を取る製糸業も同様に発展しました。明治5（1872）年に官営富岡製糸場が開業すると、繭を供給するために本庄町の繭市場がより一層にぎわうことになりました。また、大量の繭や絹が取引されるようになったことから、明治27（1894）年には本庄商業銀行が設立され、大量の担保用の繭を保管するための煉瓦倉庫れんがが明治29（1896）年に建設されました。

大量の物資が輸送されるようになった背景には、需要の増加以外にも交通面での変革がありました。江戸時代には本庄地域北部を流れる利根川を利用した舟運が盛んに行われていました。三友河岸・山王堂河岸・一本木河岸等が設けられ、江戸へ物産が運ばれましたが、明治16（1883）年に日本鉄道が敷設され本庄駅が開業されたことで、舟運に比べ安全性や速度に優れた鉄道運輸が主力となりました。

本市域においても大正4（1915）年に本庄・児玉間を結ぶ本庄電気軌道が営業を開始し、昭和6（1931）年には八高線児玉駅が開業しました。同年、本庄地域北部においても利根川に坂東大橋が架橋されるなど次第に交通網が整備されていきました。

●産業・生産

児玉地域では、養蚕業や製糸業だけでなく、それらの産業の基礎となる養蚕改良や飼育方法の普及といった教育・研究分野も盛んに行われていました。木村九蔵は、明治5（1872）年に新しい蚕の飼育法である「一派温暖育いっぺおんだんいく」を考案しました。明治10（1877）年には養蚕改良競進組きょうしんぐみを組織し、明治17（1884）年には養蚕改良競進社に組織を拡大させました。また、明治27（1894）年には競進社蚕業伝習所内に模範蚕室もはんさんしつを建設しました。

●社会・生活

鉄道沿線に機械製糸の製糸場が進出したことで、本庄町は、宿場町から商業都市に変貌し、中山道沿いに近代的な建造物が建てられるようになりました。

明治16（1883）年に建設された旧本庄警察署は、コリント式オーダーの柱を持つ洋風建築として現在も異彩を放っています。本庄宿で郵便局を開設した諸井泉衛が明治13（1880）年頃に自宅として建設した諸井家住宅は、和風の造りを基本としながらも、洋風の構造や装飾が取り入れられています。昭和9（1934）年には、洒落た装飾や洋風の外壁を持つ本庄郵便局舎（旧本庄仲町郵便局なかもち）を二代目庁舎として建設しました。

また、元小山川に架かる伊勢崎道の寺坂橋てらさかばしは、明治22（1889）年に建設された石造アーチ橋で、現

役で使用されています。自動車の普及に伴い伊勢崎新道が開削されると、モダンな外観の賀美橋^{かみばし}が大正15（1926）年に架けられました。

児玉地域では、市街地に近代水道が整備され、水道施設の児玉町旧配水塔が建設されました。昭和12（1937）年には、児玉地域と現在の美里町北部地域から深谷市西部の榛沢^{はんざわ}地域までかんがいする児玉用水（美児沢^{みこさわ}用水）の間瀬堰堤^{えんてい}が建設されました。

産業の発展や近代的な建築物の建設が進む一方で、明治17（1884）年に勃発した秩父事件のように自由民権運動の高まりや不景気に伴う暴動が各地で起きました。金屋地区で起きた暴動は「金屋戦争」として知られています。

●信仰・祭礼

明治時代以降も市内各地で民俗芸能が継承されてきました。その中でも、特に本市の特徴的な民俗芸能の一つとして神楽^{かぐら}があります。江戸時代より市内各所で神楽が伝えられていましたが、明治15（1882）年の遊芸人取締規則の施行に伴い、金鑽神社神楽組として再編されました。市内では、本庄組^{ほんやまき}・宮崎組^{みやざき}・杉田組^{すぎた}・太駄組^{おおだ}・根岸組^{ねがし}の5組が現在も活動しています。このほかにも、児玉地域のうち西小平^{にしごだいら}と元田^{もとだ}では、万作^{まんさく}が行われました。

また、本庄地域では金鑽神社の例大祭^{つげまつり}の附祭として山車10台が、児玉地域では八幡神社の例大祭の附祭として屋台1台と山車3台が街中を巡行します。いずれの神社の例大祭も近世より続けられてきましたが、明治時代以降に山車や屋台が製作されたことで、附祭で巡行されるようになりました。

3-6 本庄市ゆかりの偉人

埼玉県：「埼玉ゆかりの偉人データベース」には、[表 1-19] に示した条件を満たす偉人が掲載されています。このうち、本庄市にゆかりのある偉人は27名に上ります [表 1-20]。以下に主要な3人の偉人について、その功績などを記述します。

表 1-19 偉人の定義（埼玉県：「埼玉ゆかりの偉人データベース」抜粋）

県にゆかりのある*1人物（物故者）で、次のいずれかの条件を満たすものをいう	
1.	県の内外で活躍し、その活動分野において顕著な功績が認められること（その功績が確認できる資料等*2が存在していること）。
2.	その人物の功績やゆかりの史跡等を活用し、地域*3のまちづくりに生かしていること。 ただし、明治時代以降の功績で、下記のいずれかに該当する業績は原則として対象としない。 政治活動上の業績*4、宗教上の業績、内外の戦争での業績、公職中の職務上の業績*5。
*1 本県の出身、本県に居住したことがある、または、本県にその人物ゆかりの史跡等が現存していることをいう。	
*2 その功績が明文化されている書物等をさす。	
*3 必ずしも市町村全域でなくてもよい。	
*4 公職中（首長、議員在職中）の職務上の業績をさす。	
*5 役所、学校などの職務上の業績をさす。	

① 塙 保己一

塙保己一は、江戸時代の国学者です。延享3（1746）年に武蔵国児玉郡保木野村の荻野家おぎのに生まれました。7歳の春に病気により失明、15歳にして江戸に出て盲人一座「当道座」へ入り、雨富須賀一あめとみすがいちけんぎょう検校に弟子入りしました。雨富検校のもとで学問に専念し、萩原宗固はぎわらそうこ・川島貴林かわしまたかしげ・賀茂真淵かものまぶちらより国学・和歌・漢学・国史等を学びました。勾当こうとうへ昇進したのち、「世のため後のため」になることをしたいと考え、散逸した古典典籍類を取りまとめ、後世に国学を学ぶ人の助けとなるようにと『群書類従』の出版を志しました。また、幕府に願い出て和学講談所を設立し多くの門弟を育成しました。水戸藩の『大日本史』の編纂にも従事し、文政2（1819）年には『群書類従』666冊を完成しました。なお、明治時代以降、和学講談所の史料編纂事業は、東京大学史料編纂所に受け継がれました。



図 1-18 塙保己一

② 木村 九蔵

木村九蔵は、上野国緑埜郡高山村の高山家たかやまの5男として生まれ、幼少の頃から、後に高山社を創立した兄・長五郎ちやうごろうとともに養蚕の研究に励みました。元治元（1864）年に武蔵国児玉郡新宿村の木村家の養子となった後も養蚕改良を続け、明治5（1872）年に新しい飼育方法「一派温暖育」を発表しました。その後、明治10（1877）年に同志を募り養蚕改良競進組を結成、九蔵はその組長となりました。明治17（1884）年には組織を改編して養蚕改良競進社とし、児玉町に出張事務所と競進社蚕業伝習所（旧児玉白楊高校の前身）を設立しました。蚕・繭の品質の改良、養蚕飼育法の研究及び普及などに励み、さらに多くの子弟を育てて近代産業・蚕業教育など多方面で大きな業績を残しました。



図 1-19 木村九蔵

③ 諸井 恒平

諸井恒平もろいつねへいは、若いころから実業家としての才覚があり、明治11（1878）年に16歳で本庄生糸改所頭取、明治19（1886）年に児玉郡外二郡蚕糸組合の副頭取、同年に本庄郵便局長と若くして要職を歴任しました。明治20（1887）年には親類であった渋沢栄一しぶさわえいいちの勧めで深谷の日本煉瓦製造株式会社に勤務し、明治40（1907）年に専務取締役にならば昇進しました。この間にも、明治32（1899）年に日本工業協会理事、明治39（1906）年に東京毛織株式会社専務取締役、明治43（1910）年には秩父鉄道株式会社取締役を務めました。また、秩父鉄道の役員となった際に武甲山の石灰岩ぶこうざんに注目し、セメント製造事業を開拓し秩父セメント株式会社を創設、大正12（1923）年に社長に就任、大正14（1925）年には秩父鉄道株式会社の社長も兼任しました。秩父セメント株式会社と秩父鉄道株式会社は、密接な関係にあったため、両会社の発展に寄与しました。

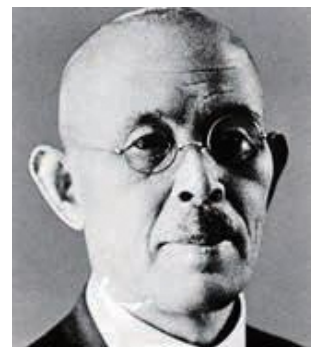


図 1-20 諸井恒平

表 1-20 本庄市ゆかりの偉人（埼玉県：「埼玉ゆかりの偉人データベース」抜粋）

ふりがな 氏名	生年 - 没年	出生地	分野	主な功績
ゆかりの場所（所在地）：説明				
いしかわ 石川 さん しろう 三四郎	1876-1956	本庄市	その他	社会思想家 石川三四郎翁顕彰碑（本庄市若葉第二公園）：昭和 52（1977）年完成、三四郎の言葉を刻む
いのうえ 井上 ため じろう 為次郎	1834-1908	本庄市（旧児玉町）	教育	浅田流裁縫の普及 實相寺（児玉町児玉）：墓と頌徳碑がある
いまい 今井 わしやう 和昇	1820-1903	本庄市（旧児玉町）	その他	剣術家 薬師堂（児玉町元田）：和昇翁の頌徳碑がある
おざわ 小沢 よしみつ 義光	不明	本庄市（旧児玉町）	その他	剣術家 駒形神社（児玉町蛭川）：義光奉納の剣術額がある
きむら 木村 くぞう 九蔵	1845-1898	群馬県	産業	養蚕改良家・一派温暖育を発明 競進社模範蚕室（児玉町児玉）：木村九蔵は競進社を設立、養蚕技術の普及に努めた。
くぼた 久保田 そひやう 素瓢	1832-1910	本庄市	文学	寺子屋師匠、俳人 頌徳碑（四方田）
くめ 久米 いつえん 逸淵	1790-1861	本庄市（旧児玉町）	文学	俳諧宗匠・「すみれ塚集」ほか 八幡神社（児玉町児玉）、俳額、芭蕉句碑がある／玉蓮寺（児玉町児玉）、俳額、墓、句碑がある
くめ 久米 せんじゆ 千寿	1800-1858	本庄市（旧児玉町）	文学	狂歌・和歌歌人 —
くわばら 桑原 ぼくりん 北林	1790-1884	本庄市（旧児玉町）	芸術	書家 日枝神社（吉田林）の藤池の碑、成身院百体観音堂（児玉町小平）の碑ほか
さとう 佐藤 とら じろう 虎次郎	1864-1928	本庄市（旧児玉町）	産業	海外雄飛・豪州で会社設立 茂木家（児玉町太駄）：虎次郎の生家
たけまさ 武正 なん ろ 南廬	1786-1865	群馬県藤岡市	芸術	画家・「百鶴図」 金鑽神社（千代田）：幣殿の天井画、板戸の雲竜画
たむら 田村 へい べい 平兵衛	1756-1832	本庄市（旧児玉町）	その他	柔術家 玉蔵院（児玉町児玉）：寺に墓がある
とこよだ 常世田 ちやうすい 長翠	1750-1813	千葉県	文学	俳諧宗匠・俳書「黒襦宜」 —
とや 戸谷 そうう 双鳥	1774-1849	本庄市	文学	俳人、豪商として地元の文化に貢献 雉岡城跡内金毘羅神社の俳句奉納額（児玉町八幡山）
なかがみ 中神 りやうほ 長甫	1791-1869	長瀬町	教育	医師・寺子屋開設 八幡神社（児玉町児玉）：筆塚がある／實相寺（児玉町児玉）：墓と頌徳碑がある
なかざと 中里 ちゆうべえ 忠兵衛	1812-1891	本庄市（旧児玉町）	産業	生糸仲買商 岩上神社（児玉町太駄）：忠兵衛奉納の石灯籠がある
のざわ 野沢 しやうぎぶらう 正三郎	1814-1861	本庄市（旧児玉町）	産業	生糸問屋の創設 玉蔵寺（児玉町児玉）：墓がある
はなわ 埴 ぼ きち 保己一	1746-1821	本庄市（旧児玉町）	教育	国学者・「群書類従」の刊行 国指定史跡・埴保己一生家（児玉町保木野）、埴保己一墓（児玉町保木野）ほか
ひらの 平野 こくめい 克明	1749- 不明	本庄市（旧児玉町）	芸術	書家 實相寺（児玉町児玉）：平野家墓地がある
ほそむら 細村 せい かの 青荷	1803-1881	本庄市（旧児玉町）	文学	俳人・「春水集」ほか 光徳廃寺墓地（児玉町児玉）：墓がある／八幡神社（児玉町児玉）：青荷建立の頌布句碑と俳額がある
ほんじやう 本庄 ふいち 普一 (ほんじやう しんいち)	1798-1846	本庄市	その他	眼科、内科、外科医 浄眼寺（児玉町八幡山）に葬られる
もろい 諸井 しゆんけい 春畦	1862-1941	本庄市	芸術	書家・「書法三角法」 安養院（千代田）：庭に「春畦諸井先生碑」が建てられている

ふりがな 氏名	生年 - 没年	出生地	分野	主な功績
	ゆかりの場所（所在地）：説明			
もろい づねへい 諸井 恒平	1862-1941	本庄市	産業	セメント会社創設 県指定文化財・諸井家住宅（中央）
もろい ろくろう 諸井 六郎	1872-1940	本庄市	その他	外交官、郷土史家・「徳川時代之武蔵本庄」 —
もん や 門弥	不明	本庄市	産業	北堀村の百姓、発明家 —
よしだ きよひで 吉田 清英	1840-1918	鹿児島県	産業	蚕糸業の振興 —
よもだ そうえん 四方田 草炎	1902-1981	本庄市	芸術	素描家・「四方田草炎素描集」 —

3-7 合併の推移

近代から現代までの本庄市の沿革を〔図 1-22〕にまとめました。

明治 22（1889）年の町村制の施行により本庄地域では、本庄宿が「児玉郡本庄町」となり、児玉地域でも児玉郡児玉町・八幡山町が合併し、「児玉郡児玉町」が発足しました。また、両町周辺の村々の合併も進められました〔図 1-21〕。

町村合併促進法により、昭和 29（1954）年 7 月 1 日、本庄町と周辺 4 村（藤田村・仁手村・旭村・北泉村）が合併し旧「本庄市」となり、昭和 30（1955）年 3 月 20 日には、児玉町と周辺 3 村（金屋村・秋平村・本泉村）が合併し児玉町の範囲が拡大しました。昭和 32（1957）年 7 月 18 日には児玉郡共和村が分村して、大字今井・共栄の一部が旧本庄市、残部が児玉町に分割編入しました（共和村廃止）。

平成になると、いわゆる「平成の大合併」と呼ばれる全国的な市町村合併の動きが生じ、旧本庄市と児玉町も平成 18（2006）年 1 月 10 日に合併し、新「本庄市」が誕生しました。

なお、平成の大合併に伴い住所表記が変更されることとなり、本庄地域では大字表記を廃し、児玉地域では郡名と大字表記を廃し市名の次に「児玉町」を付すこととなりました〔表 1-21〕。

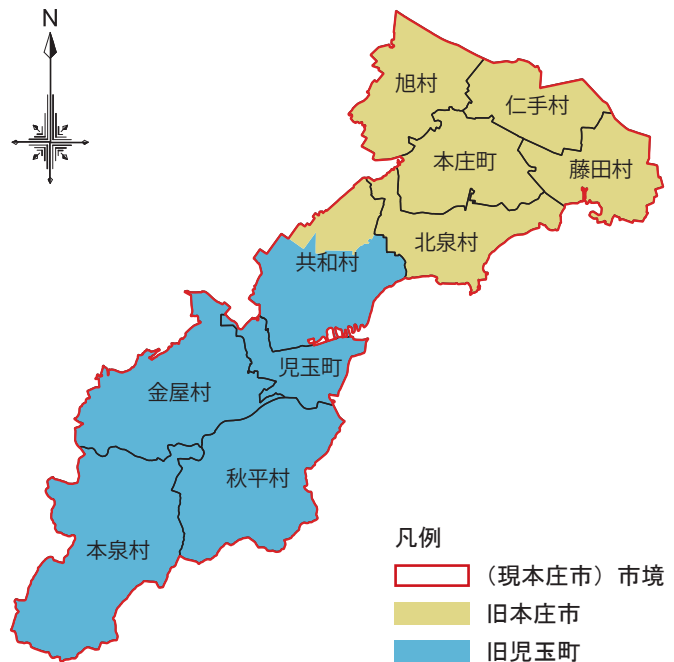


図 1-21 本庄市の合併（模式図）

国土交通省：「国土数値情報（行政区域データ）」を加工して作成。
 ※実線区分・旧市町村名：大正 9（1920）年の行政区分データ参照。
 色分け区分：昭和 35（1960）年の行政区分データ参照。
 ※本図の色分けは図 1-22 と整合します。

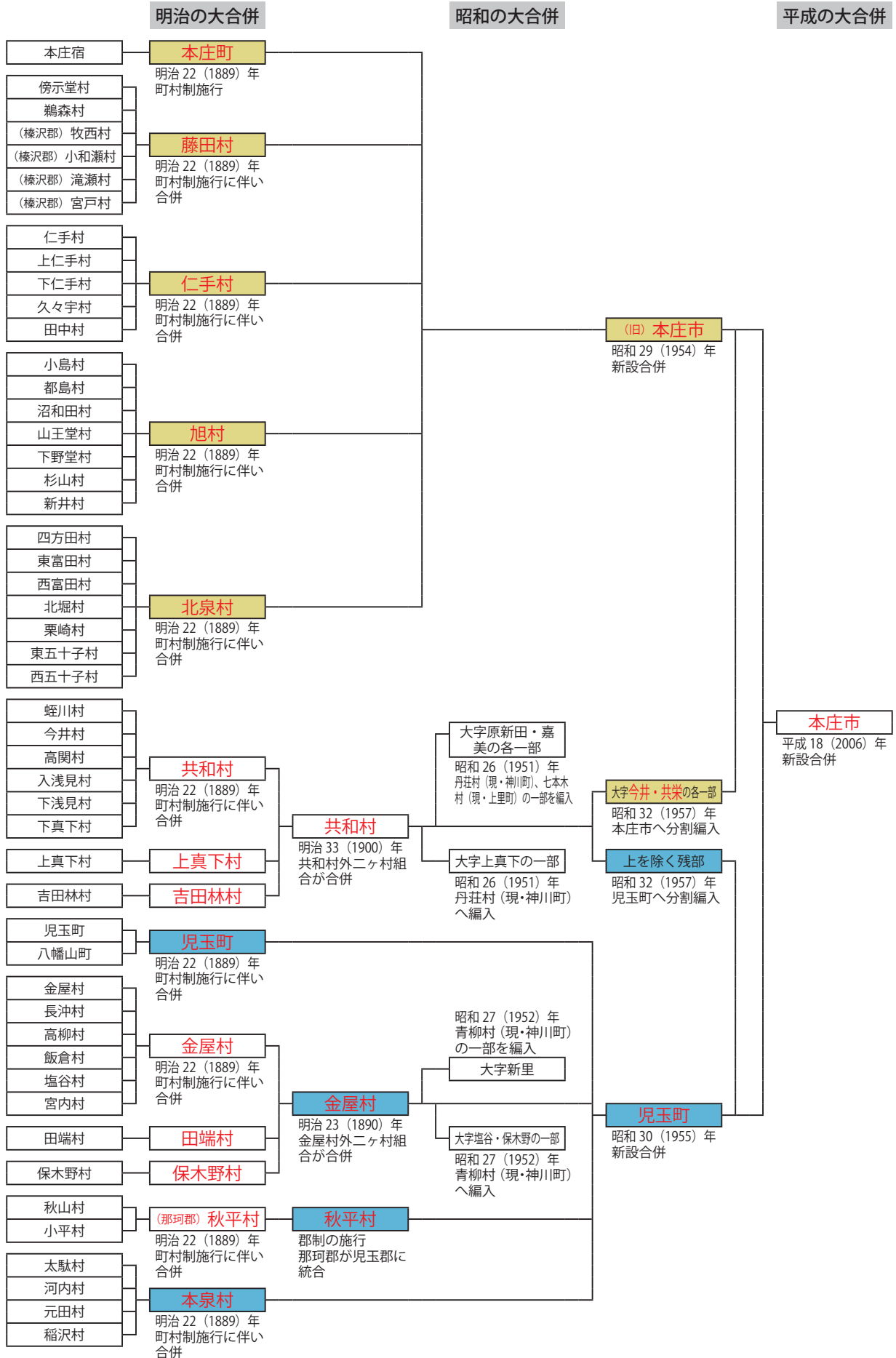


図 1-22 本庄市沿革図

表 1-21 現在の本庄市の地名

旧市町村	地区名	(旧大字)	ヨミ	旧市町村	地区名	(旧大字)	ヨミ	
旧本庄市	旭地区	小島南	オジマミナミ	旧本庄市	本庄地区	千代田	チヨダ	
		小島	オジマ			若泉	ワカイズミ	
		下野堂	シモノドウ			中央	チュウオウ	
		都島	ミヤコジマ			銀座	ギンザ	
		山王堂	サンノウドウ			本庄	ホンジョウ	
		沼和田	ヌマワダ			東台	ヒガシダイ	
		杉山	スギヤマ			日の出	ヒノデ	
		新井	アライ			前原	マエハラ	
		万年寺	マンネンジ			柏	カシワ	
	北泉地区	早稲田の杜	ワセダノモリ			駅南	エキナン	
		北堀	キタボリ			見福	ケンブク	
		栗崎	クリザキ			五十子	イカッコ	
		西五十子	ニシイカッコ			南	ミナミ	
		東五十子	ヒガシイカッコ			栄	サカエ	
		西富田	ニシトミダ			寿	コトブキ	
		東富田	ヒガシトミダ			けや木	ケヤキ	
		四方田	シハウデン			緑	ミドリ	
		今井	イマイ			朝日町	アサヒチョウ	
		共栄	キョウエイ			照若町	テルワカチョウ	
		いまい台	イマイダイ			台町	ダイマチ	
	四季の里	シキノサト	諏訪町		スワチョウ			
	仁手地区	仁手	ニッテ		本町	モトマチ		
		下仁手	シモニッテ		旧児玉町	児玉南地区	児玉南	コダマミナミ
		久々宇	クグウ				児玉地区	八幡山
		田中	タナカ			児玉		コダマ
		上仁手	カミニッテ			金屋地区	金屋	カナヤ
	藤田地区	鶺森	ウノモリ				長沖	ナガオキ
		傍示堂	ハウジドウ				高柳	タカヤナギ
		牧西	モクサイ				飯倉	イイグラ
		小和瀬	コワゼ				宮内	ミヤウチ
		宮戸	ミヤド				塩谷	シオヤ
		堀田	ホッタ				保木野	ホキノ
		滝瀬	タキセ		田端		タバタ	
秋平地区		秋山	アキヤマ					
	小平	コダイラ						
本泉地区	太駄	オオダ						
	河内	コウチ						
	稲沢	イナザワ						
	元田	ゲンダ						
共和地区	蛭川	ヒルガワ						
	下真下	シモマシモ						
	共栄	キョウエイ						
	上真下	カミマシモ						
	吉田林	キタバヤシ						
	入浅見	イリアザミ						
	下浅見	シモアザミ						
	高関	タカゼキ						

備考

- ・現在、本庄市は大字表記をしていないため、旧大字を（カッコ）書きとしました。
- ・旧児玉町の住所表記は本庄市のあとに「児玉町（旧大字）」と付きますが、ここでは省略しました。